

Tsukuba

COMMUNICATIONS *Spring*

座×談×会

筑波大学の 科学的トレーニングで 世界水準に

筑波大学 学長特別補佐

永田 恭介

筑波大学 体育系教授

西嶋 尚彦

サッカー日本女子代表

安藤 梢

人間総合科学研究科
体育科学専攻 博士後期課程 3年

サッカー日本女子代表

熊谷 紗希

体育専門学群 3年



- ⑧ 特集 学生の震災復興再生ボランティア
- ⑩ 聴 山海嘉之教授
- ⑫ 学内組織紹介 保健管理センター
- ⑭ 名物先生登場 仲里 友一 教諭(附属駒場中・高等学校)
- ⑯ Sports Club テニス部
- ⑰ Art & Culture 斬桐舞
- ⑲ TOPICS イベント/協定締結/地域貢献/受賞
- ⑳ OB&OG 武田 真一さん
- ㉒ リレーエッセイ
- ⑳ つくばNOW
- ㉑ つくばSupporters
- ㉓ 新聞掲載・テレビ放送一覧
- ㉕ イベントカレンダー



筑波大学の科学的トレーニングで世界水準に

筑波大学 学長特別補佐

永田 恭介

筑波大学 体育系教授

西嶋 尚彦

サッカー日本女子代表

人間総合科学研究科 体育科学専攻 博士後期課程 3年

安藤 梢

サッカー日本女子代表

体育専門学群 3年

熊谷 紗希



写真:アフロ

サッカー女子ワールドカップドイツ大会で世界一の栄冠を掴んだなでしこジャパン。本学学生の安藤梢選手と熊谷紗希選手は、その全試合に出場し、優勝に大きく貢献しました。現在は、ドイツ女子プロリーグのチームで活躍中のお二人ですが、帰国する度に、本学でトレーニングを重ねています。今回は、永田恭介学長特別補佐と、指導教員の西嶋尚彦教授を交えて、世界一となり、国民栄誉賞を受賞した感想や、大学への想い、今後のことなどについて、率直に語っていただきました。

永田: 進行役を務めさせていただく永田です。サッカーは、自分でやるのも、観戦するのも大好きですので、今日はとても楽しみにしていました。どうぞよろしくお聞きします。さて、やはり最初にお聞きしたいのは、ワールドカップの決勝戦のことです。よくぞ優勝してくれ



永田 恭介 学長特別補佐

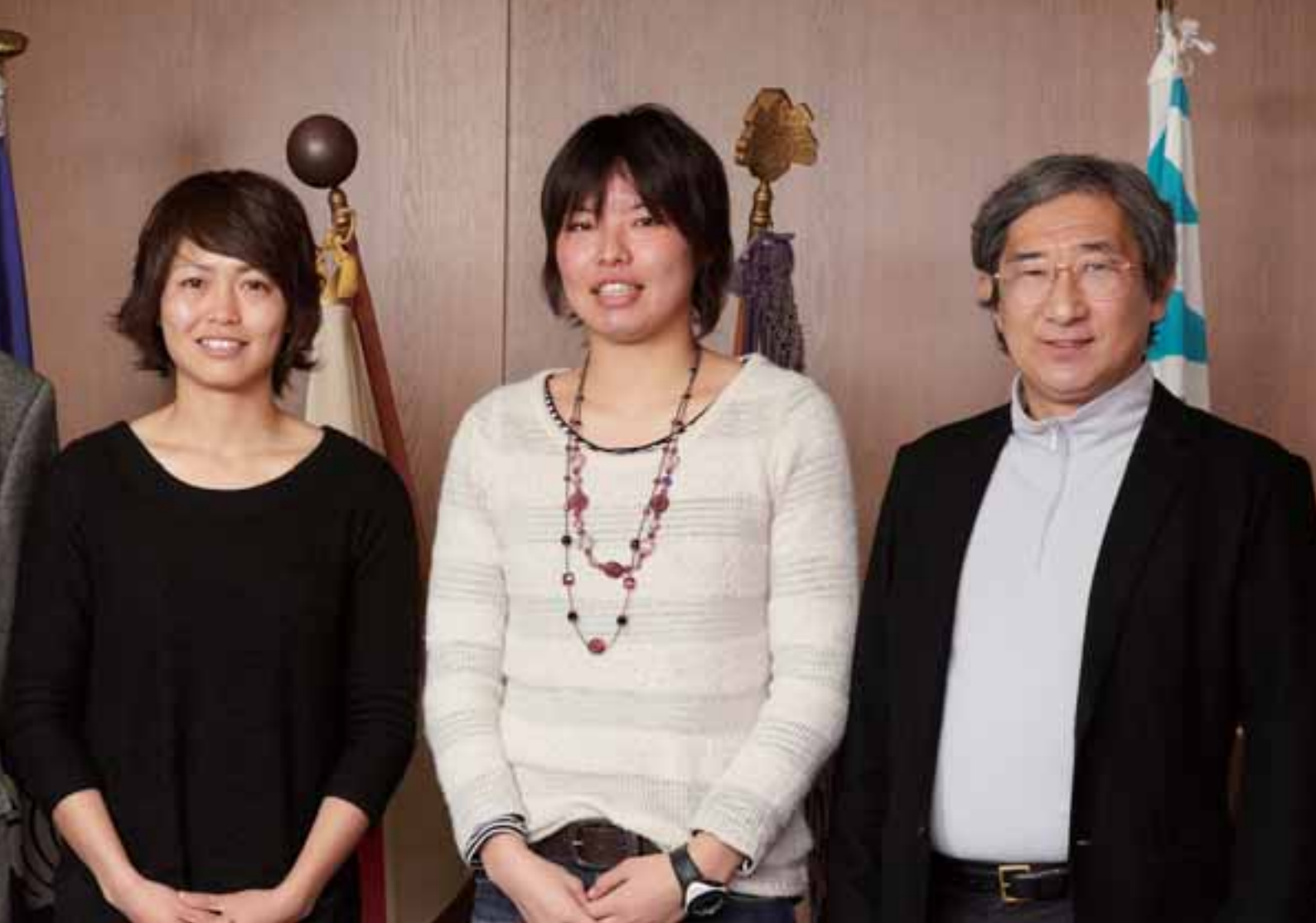
ました。「スポーツが頑張ると、みんなが頑張れる」のだと、本当にそう思いました。でも、正直なところ、それまでアメリカに勝ったことがないわけだから、「優勝はちょっと厳しいだろうな」と思っていました。どうして勝てたのだと思いますか？

安藤: 大会が始まる前は、アメリカや韓国と親善試合をしたりしても勝てなかったのですが、大会中に、だんだん強いチームになっていったと思います。一試合一試合、予選リーグで勝つことで自

信がついていって、決勝トーナメントでは、チームがぐっと成長しました。紗希たち若い選手が、戦うごとに自信をつけて伸びていったということも大きかったですね。

熊谷: 試合を重ねる度に、チームワークも、どんどんよくなっていきました。

永田: 決勝戦は、応援しながらひやひやしたけれど、一番面白い展開にしてくれて…。最後はPK戦になり、熊谷選手のキックで優勝が決まりました。蹴る前はどんな気持ちでしたか？



熊谷:名前を呼ばれて並んだ時には、蹴る所は決めていました。「余計なことを考えたらだめだな」と思ったので、何も考えないようにして思い切りやろうと…ただそれだけで蹴りに行きました。

永田:入ってどう思いましたか？

熊谷:「入ってよかった」とホッとしました。

永田:嬉しいというより、ホッとするものなのですね。やっぱり、責任感なんでしょうね。蹴る場所は迷わなかったようだけれど、あのキッカーから見て左上というのは、PKを蹴る場所としては、一番難しい所ですよ。バジオ

もプラチニも…名選手もはずす難しい場所。よくあそこを狙いましたね？

安藤:あそこのキック、筑波大でたくさん練習しましたから。

永田:大学で練習していたキック？

熊谷:はい、練習通りでした(笑)

永田:驚きでもなんでもなくて、練習通りだったんですね。決勝戦のアメリカ戦と同じかそれ以上に、準々決勝のドイツ戦も重要だったと思いますが、どうですか？ドイツ戦の時の気持ちとアメリカ戦の時とでは、何か違いましたか？

安藤:正直、「ドイツと当たりたくないか

ら、決勝トーナメントに1位で上がりたい」と思っていました。でも、イングランドに負けて、いざドイツと当たるとなった時には、しっかり切り替えることができました。「ドイツのホームで、何万人というお客さんの中で戦える、こんなことはもうないだろう」とすごくポジティブに考えられて…。みんなが「失うものは何もない、もうドイツ戦に全部出し切ろう」という気持ちでした。そして、思った通りに全部出し切れて、耐えて、耐えて、1点を取って勝ちました。あの試合で、チームに、「たとえ押されても、失点をしないで乗り切れるのだ」というものすごい自信ができました。

写真：アフロ



01



永田:熊谷選手は？

熊谷:あの時、私は、ワールドカップが終わったらドイツに移籍するということが決まっていた。ドイツの代表チームには、移籍先のチームの選手が7~8人いたのです。それで、「ここで普通に負けちゃったら、絶対、入った時になめられるな」と思っていました。「ここで良いプレーができないとダメ」という強いプレッシャーを感じながら試合に臨んで、抑えて、勝つことができた。自分自身にとっても、大きな自信になりました。



熊谷 紗希 体育専門学群3年

永田:完全なアウェー。なかなか経験できない、良い経験をされたと思います。

安藤:気持ちよかったです。あの中でプレーするのは。

永田:完全アウェーの状況で、日の丸を見て、国歌を聞くというのは、どういう気分ですか？

安藤:国歌を聞くと、ぐっとくるというか。誇りを持って戦うという気持ちになります。

熊谷:国歌を聞いて最高!という気分になります。

永田:誰でも日本人が海外に行くと、「日本人の〇〇さん」って見られるわけだけど、そういう感じの究極の場面なのだろうと思います。世界一になる

と、背負うものも大きくなります。日本国に対して貢献をしたということで、国民栄誉賞も受賞しました。もう、単なるサッカー選手ではなくなっているわけです。国民栄誉賞をいただいて、大きな変化はありましたか？

安藤:ほんとうに光栄なことで、すごく気がひきまる思いです。そして、今回のワールドカップで、日本に元気を与えることができたから、いただけた賞だと思うので、サッカーの力はすごいな、と思いました。これからも、自分が一生懸命何かをすることで、いろんな人に勇気を与えるような人になりたいと思います。

熊谷:私も、本当に光栄に思います。そして、周りから「国民栄誉賞のなでしこ」と見てもらえる半面、期待されるだけの結果も出していかなければならないと思っています。ワールドカップでは、自分たちが精いっぱいやった結果で、みんなに、勇気をもらえたって言われたことが本当に嬉しかった。次は、ロンドンオリンピックで、その結果だったり、戦っている姿が、またみんなの力になればいいなと思います。そのために、今自分がやれるだけのことをやろうと

いう気持ちです。

永田:サッカーを追求していて、社会の中にいたんだと認識する…そういう意味では、受賞はとてもメモリアルですね。さて、今度は、視点を変えて、筑波大学の学生としての話を聞かせてください。筑波大学を選んだ一番の理由は何ですか？

安藤:高校生の時に、日本代表に初めて選ばれてアメリカ代表と試合した時に、身体能力にとっても大きな差があって、自分の技術が全く出せませんでした。それで、すごく衝撃を受けて、このままでは世界と戦えない、自分をしっかり鍛えなければ、と思ったのです。筑波大学は、中山選手(現・コンサドーレ札幌)や井原選手(現・柏レイソルヘッドコーチ)のように、プロで活躍する選手が多い大学なので興味がありました。見学に来た時に、施設も充実していましたし、大学で科学的なトレーニングをすると短距離走のタイムが縮む、というようなお話を聞いて、入りたいと思いました。

写真: アフロ





西嶋:筑波大学でトレーニングすると、誰でもタイムがアップしますからね。そういう話を紹介したんだと思



西嶋 尚彦 体育系教授

手は、筑波大学で大変身した選手。大学でのトレーニングで100_m走が11秒台になりました。中山選手は、もともと速かったけれど、大学のトレーニングでさらに速くなりました。

永田:なるほど。そういう話を聞いて、トレーニングの質が高そうだと感じて選んだわけですね。熊谷選手はどうですか？

熊谷:私も、高校生の時に初めて日本代表に選ばれました。代表の中で、体力測定などをすると、安藤さんは、なでしこジャパンの中でも飛び抜けているんです。それで、いろいろなトレーニングを教えてもらったり、大学の話を聞いたりしているうちに、筑波大学に興味を持ちました。所属するチームが、安藤さんと同じ浦和(浦和レッズレディース)に決まっていたこともあって…。だから、私は、安藤さんに憧れて筑波大学に入ったという感じがですね。

永田:スポーツに力を入れている大学はたくさんあるけれど、本学は特別ですよ。スポーツやトレーニングを科学的に研究していますから。筑波大を選んでも

らって、僕らにとってはハッピーだったし、二人にとっても、正解だったと思います。でも、なでしこリーグのクラブに所属しながらの学生生活はたいへんだったでしょう。

安藤:つくばに住んでいたの、授業が終わったら、車で浦和に行き、練習して戻ってくるという生活でした。両立は大変でしたが、周りの友達もとても意識が高くて、部活を頑張りながら、勉強も両立していたので、一緒に頑張れた感じでした。

熊谷:私は、浦和のアパートから大学に通いました。私も本当に仲間に恵まれました。友達も頑張っていました。私の場合は、支えてもらったという感じが。代表の合宿や海外遠征から帰ってくると、ノートを見せてもらったり。海外遠征先に連絡をもらって、代表期間中にレポートを作成して、提出したこともありました。

永田:それは、立派です。スポーツで有名な他の大学は、寮生活が強制されて、栄養管理からなにかから全て管理されるでしょう。その点、筑波大学は、野放しというか。トレーニング生活の中の食事は、どうしていますか？

安藤:食事は、ずっと自炊しています。最初は、自分の知識の中でやっていたんですけど、西嶋先生に出会って、自分を改造する「チーム梢」というのを立ち上げていただき、さまざまな試みをした中で、栄養の指導も受けました。自分で栄養管理ができるようになるまで、最初の1年くらいは、自分が食べたものをチェックしてもらい、足りない栄養素を調べてもらっていました。



安藤 梢
人間総合科学研究科
体育科学専攻 博士後期課程 3年

永田:食生活というのは、薬より大切ですね。毎日3回食べるものだから、その蓄積は大きいと思います。学長のご専門は、メタボリックシンドロームですが、薬よりも食生活が一番と言っておられま

した。食生活を変えるとすごく変わるでしょう。

安藤:はい、すごく変わりました。西嶋先生に出会って、ライフスタイルからトレーニングまで、今までの自分のやり方をガラッと変えて、10年それをやり続けてきて、その成果が出てきたと思っています。

永田:西嶋先生に出会って、科学的トレーニングの道に入ったということですね。

西嶋:アスリートというのは、特別な生活環境にあります。でも、「特別」ということを認識させる教育環境がないので、小学校からずっとトップクラスでやってきた選手でも、そうした意識は教育されていないのです。安藤選手を世界水準にするために、「チーム梢」というプロジェクトチームをつくり、アスリートの成長に適したトレーニング生活環境を整えることを軸にして、トレーニングすること、食べることに、睡眠して成長すること、などから指導していきました。体力・運動能力、技術、戦術、メンタリティの向上は、科学的な根拠に基づいたトレーニング生活を、緻密に、計画的にやるのが一番の近道なのです。もちろん、「チーム紗希」もあります。これらは、2人を世界水準に育成するプロジェクトチームです。

永田:最近よく、個人の選手をサポートする「チーム何々」という言葉を耳にしますね。

02



03

西嶋: 世界水準の一流選手というのは、一人一人の個性を伸ばして、仕上げなければならないからです。水泳の北島選手を支える「チーム北島」や、マラソンの高橋選手の「チームQ」などが有名ですが、「チーム梢」の結成の方がもっと早かったですよ(笑)。永田先生にも、今後、ぜひ加わっていただきたいのですが…、サッカー日本代表のチームドクターだった宮川先生、鍼治療の宮本先生、トレーナーの福田先生などに協力していただいています。他にも、リハビリの時には、水泳部の椿本先生に、水中トレーニングの指導をしていただき、スプリントは、谷川先生他、陸上研究室総出でお世話になっています。筑波大学は、それぞれの分野のトップの専門家が揃っていますから、世界最先端の最新のトレーニング指導やケアや治療をしてもらえます。

永田: 先生方からすると、安藤選手や熊谷選手が、研究材料になっているんですね。

西嶋: 私から見るとそうです。安藤選手には、中山選手や井原選手を育成したときより、さらに、徹底的に個の力を育成するように指導しました。安藤選手は、月1回、ドイツ代表の選手たちと、ケルン体育大学スポーツサイエンス研究所で、スプリントトレーニングをしているのですが、スプリントが速くて、走るフォームがいいということで、お手本を見せています。筑波大学の陸上研に指導してもらおうと、

スプリントが世界水準になるということです。30秒走のタイムで言うと、科学的トレーニングの成果で、0.5秒ダウンして、4秒を切るようになりました。

永田: 素晴らしい成果ですね。

西嶋: アスリートの運動能力は、20歳を超える時に、ぐんと伸びます。私が思い描くのは、植木鉢のイメージなんです。種は、環境が整ってから、芽を出して、環境がいいほどぐんぐん伸びるでしょ。つまり、自分に良いトレーニング生活の環境を作れば、必ず伸びます。アスリートに限らず、自分がなりたいものがあつたら、なれるように環境を整える。筑波大学は、素晴らしい施設とあらゆる分野の専門の先生がいる植木鉢です。筑波大学の学生さんは、そういう素晴らしい環境にいることを認識して、活用して、大きく成長して欲しいと思います。

永田: 今、2人はドイツで生活していて、筑波大学の「チーム梢・紗希」から離れているわけですが、そのあたりは大丈夫ですか？

西嶋: 2人は、もうトレーニング理論と方法を理解していますから、自分で判断して、トレーニング生活をコントロールできます。以前は、基本的な運動能力を筑波大で身につけて、夕方は、浦和でやっていたから、その延長線上ですね。だから、帰国した時には、必ず大学にトレーニングキャンプに来るのです。

永田: なるほど、短い帰国の間も、大学にトレーニングに来る理由がわかりました。ところで、ドイツに行って学んだことはなんですか？

安藤: 日本は、パスをつないだり、技術がある中でやっていて、ドイツは、すごくスピードがあつてパワフルで、というようにスタイルが全く違います。その中で、だんだん、自分らしさが出せるようになってきた感じです。あとは、文化が全然違うので、そういう異文化の中でやるということで、いろいろ学んでいます。

熊谷: 私は、ドイツに行って半年くらいなので、まだ、何を学んだかを言葉にできないのですが、サッカーでは、もっと自分を出していきたいとか、もっとうまくなりたいと思っています。生活の部分では、フランクフルトのチームにはドイツ人だけではなく、いろいろな国の選手が7人もいるので、チームメイトと一緒にご飯にいったりすると新鮮ですし、そういう中で、いろんな経験をしています。

永田: 周りの環境が違つと、どこが違つのかな、どこが一緒にやっつていけるのかな、これは無理かなとか、判断する機会がたくさんあつて、おのずと自分を相対化することにつながります。グローバル社会の中では、いろんな環境の中で、どれだけ自分が相対化できるかが、非常に重要なことだと思っています。学生たちにも、短期間でもいいから、外国に行くように、

勧めています。ところで、ドイツ語はできるようにになりましたか？

安藤：私は、もう2年になるので、チームメイトと話したりはできます。

熊谷：私は、やっと、監督やコーチから言われている事がわかるようになってきたという感じです。チームメイトも私と話すときは、ゆっくり話してくれるので、普通の会話くらいは、できるようになりました。

永田：習うより慣れるですね。さて、将来のことなのですが、聞きたいことが2つあります。ひとつは、ロンドンオリンピックについて。オリンピックのために、こんなことを身につけて勝負に行くぞ、思っているような事はありますか？

安藤：今回、ワールドカップで日本が優勝したので、オリンピックでは、周りがもっと日本を研究してきます。その中でメダルを取るためには、一人一人がもっと成長して、なでしこのサッカーをもっと進化させないと勝てないと思います。そのために、まずは、自分自身が、ワールドカップの時よりも、もっともっと成長して、新しい技も身につけたい。そして、ワールドカップでゴールがなかったのが、オリンピックでは自分がゴールして、チームに

貢献したいと思います。

熊谷：私も、今は、個々でできることをやるしかないと思います。自分が所属しているドイツのクラブで、試合に出て、結果を出して、認められていくことが、なでしこジャパンのチームのためにもなると思って、そのためのトレーニングをしたいと思っています。

永田：ずっと先の将来についてはどうですか？いつかピッチに、代表の選手として立たなくなった時、こんなふうになりたいという夢はありますか？

安藤：まずは、自分自身を研究材料に10年近く研究を重ねてきているので、その研究をまとめて、博士論文をしっかりと書きたいと思っています。

永田：それはぜひいぶん近い将来ですね。

安藤：そうですね、早く書かないと(笑)。大学で科学的トレーニングをさせてもらって、自分自身を研究しながら成長できたというのが、自分の財産だと思うので、将来は、それを生かせる仕事をしたいと思っています。「筑波大学を世界水準の女子サッカー選手の育成拠点(サッカーアカデミー)にする」のが夢です。

熊谷：私は、具体的にはまだ見えていないのですけど…。大学での勉強や、科学的トレーニングは、全員ができるものではないし、ドイツにも行っているのだから、漠然とですが、こうした自分の経験が生かせる、伝えられる仕事をしたいなと思っています。

永田：最後に、筑波大の学生たちに、エールを送ってください。

安藤：筑波大学に入って、充実した施設を使わせてもらい、先生方にサポートしてもらって、自分は成長できていると思います。筑波大学には、そういうたくさんのチャンスがあると思うので、自分から積極的にチャンスを掴んで、やり続けて欲しいと思います。

熊谷：まだ、3年間しか通っていないのですけど、西嶋先生を始め、いろんな先生方や先輩方にアドバイスをいただいたり、同級生にも支えてもらったりして、出会ってすごく大切だし、すごくありがたいと思っています。ですから、そういう出会いを大切に欲しいというのと、たくさんのお会いがあるように、いろんなところに目を向けて欲しいなと思っています。

永田：本日は、ありがとうございました。

座談会を終えて ～西嶋教授から見た安藤選手と熊谷選手～

安藤梢選手が入学した頃はなでしこジャパンは強くなく、代表チームでは、アメリカ(USA)がオリンピック優勝の世界チャンピオンで、USAプロリーグにはドイツやイングランドからも代表選手が移籍していました。そこで、「世界最強リーグでプレーすることと、オリンピックやワールドカップで世界チャンピオンになること」を目標にしました。2004年アテネオリンピックではベスト8、2008年北京オリンピックではベスト4。2010年2月からは、欧州チャンピオンクラブのドイツのFCR2001デュイスブルグに移籍し、「世界最強リーグでのプレー」を実現しました。そして、2011年ドイツワールドカップで優勝して「世界チャンピオン」を達成しました。安藤梢選手の成長とともになでしこジャパンが成長しています。

熊谷紗希選手は、大学1年生で東アジア大会優勝、大学2年生でアジア大会優勝、そして、大学3年生ではワールドカップで優勝して「世界チャンピオン」を達成しました。そして、2011年7月からは、安藤梢選手と同様に、欧州チャンピオンクラブのドイツの1FFCフランクフルトに移籍し、

「世界最強リーグでのプレー」を実現しました。

2人に共通していることは、世界水準を目指していて、外国で活躍することを「ホーム」だと思っていることです。また、トレーニング生活を確実に実践すること、よく勉強することです。科学的なトレーニングの説明もそのままの用語で理解します。

今回の座談会では、2人とも、また大きく成長したなと思いました。永田先生の質問には、しっかりと答えました。世界チャンピオンになって、取り巻く環境が変わりました。ドイツ大統領と専用機で日本に来たり…。ドイツでは日本国内では会えないような水準の人と出会っています。出会った人の専門性の高さによって、自分の才能が引き出されるから、異文化の中でどんどん成長しています。

ドイツから帰ると、親元に帰って来る感じで、筑波大学にトレーニングをやりに来ます。今回、ロンドンオリンピックで優勝するサッカーのビジョンを描いて、それを実現するための準備をしました。欧州でFootballを進化させてくれる、と期待しています。



学生ならではの発想とネットワークで被災地復興・被災者支援

東日本大震災の発生以降、本学は、被災地域の復興・再生にむけて、多岐にわたる支援活動に取り組んできました。さらに、これらの活動を加速させるため、効果的かつ円滑な実施を図ることを目的とした「復興・再生支援ネットワーク」を構築しました。

一方で、震災直後から、多くの本学学生が、自発的に、被災地復興・被災者支援活動に取り組んでいます。震災から1年を期に、ボランティア活動に積極的かつ持続的に関わってきた3人の学生を中心に、学生による復興支援活動の様子を紹介します。

みこし再建支援

藤原宣也さん(生命環境研究科 博士前期課程2年)は、震災後間もなく、自転車に40種以上の工具を積んで被災地に向かいました。みこし職人である祖父の仕事場に入り出しているうちに身に付けた木工の技術が、被災地で役立つと考えたからです。

がれきの撤去や被災者の荷物運びといった支援活動を行いながら、要望に応じて、廃材を利用し、机、流し台、長椅子、本棚、洗濯小屋、倉庫、ブランコ、滑り台などを製作。7月からは、その腕前を見込んだ宮城県石巻市雄勝町の「雄勝震災復興まちづくり協議会」の依頼で、津波で大破したみこしの再建に取り組みました。

津波の記憶を、世代を超えて語り継ぐため、震災で全壊した神社のがれきを



被災した みこし

材料に使用しましたが、何百年も経った古いケヤキ材はすぐに割れてしまい、作業は難航。協力してくれていたみこし職人の祖父は、製作半ばで急逝…と、幾多の困難と悲しみを乗り越え、4か月かけて完成させました。

仮設商店街オープニングイベント「雄勝復興市」でみこしが上がると、多くの人たちが、感動のあまり号泣したそうです。

この雄勝町を代表する地場産業は硯^{すずり}ですが、津波で工場が流され、硯を加工することができない状況です。藤原さんは、現在、たくさん残っている硯石の端材を使った商品の開発に取り組んでいます。



雄勝復興市

「Tsukuba for 3.11」

中川遼太さん(生命環境科学研究科 博士前期課程修了)は、他大学の友人が代表をつとめるボランティアプログラムに参加したことをきっかけに、「より多くの筑波大生に支援活動に参加して欲しい」と考え、T-ACT※に申請して「Tsukuba for 3.11」を立ち上げました。

当初の主な活動は、ML(メーリングリスト)登録者を募り、その登録者たちに、他の支援団体が実施しているボランティアプログラムへの参加を呼び掛けたり、自分たちが参加したりすること。そして、前述の藤原さんのように、支援活動を行っている本学学生の活動報告会や、他のボランティア団体のリーダーなどを招いてのシンポジウムを開催することでした。

8月9日～11日には、福島県いわき市の小学生34人をつくばに招いた「サマーキャンプ in つくば」というプロジェクトに協力し、2日目の筑波山企画の計画・準備を全面的に担当した他、実行日には、運営メンバーや募集した本学学生計20人が、3日間にわたり、子どもたちと寝食と活動を共にしました。

こうした活動を重ねて他の組織との輪が広がり、運営メンバーも増えていくにつれて、活動の主体は、自分たちで企画したプログラムの開催に移行。現在は、宮城県の気仙沼と、福島県いわきの支援団体と連携して、現地でプログラムを実行する

ことや、福島県からつくば市に避難してきている方々との交流イベントの開催が活動の中心となっています。これまでに、気仙沼市と本学をインターネットで結び、被災者と復興について討論する「気仙沼としゃべらナイト」や、つくば市の並木交流センターに、福島県から避難してきた方と地域住民計100人を超す参加者が集まった「福島・つくば大芋煮大会」など、さまざまなイベントを開催しました。

「支援が必要な地域は他にもたくさんありますが、地域を限定することで活動拠点の方々とピンポイントでつながり、イベントを通じて、地域に根ざした中身の濃い活動ができています」と、代表を引き継いだ水落裕樹さん(生命資源学類4年)。

現在、運営メンバーは約20人、ML登録者は180人ほど。被災者支援・被災地復興の長期的サポートを実現するには、団体として継続していくことが必要です。

「筑波大学の中に、個人で被災者支援をしている学生はたくさんいるでしょうが、組織でやっているところはあまりありません。「Tsukuba for 3.11」は、何かしたいという思いを実現するプラットフォームとしての役割を担っていると思います。一人でも多くの新入生がメンバーに加わってくれることを願っています」と、最後に中川さんと水落さんが声を揃えました。



気仙沼としゃべらナイト



福島・つくば大芋煮大会

「Tsukuba for 3.11」お問い合わせ先

Mail : s0910767@u.tsukuba.ac.jp または tsukubafor311@gmail.com

Tel : 090-7417-2742 水落裕樹

T-ACT(つくばアクションプロジェクト)

学生の皆さんが自発的な活動をできるように、教職員がサポートするという試み。活動の自由度は高く、一日だけの活動も可。資金援助はないが、T-ACTフォーラムでコピーができたり、文具等の貸出しも受けられる他、専用の電子掲示板や、T-ACTのサイトを通じて広報活動ができる。参加者にはT-ACT認定書を発行。優れた活動には学長表彰も行う。

聴

世界の医療・福祉施設で活躍中

世界トップの実績と先進性を誇るHAL。運動機能が低下した患者さんや高齢者を対象とした福祉用、被災地での重作業を軽減するために開発された災害用など、すでに実用化されている技術です。さらに、福祉用HALは現在、日本全国130を超える病院や介護福祉施設などで、約300体が稼働しています。これによって実問題の情報が常に基礎研究にフィードバックできるという独特の環境が産声を上げ、国内外での連携が進んでいます。福祉大国であるデンマークやスウェーデンからは国を挙げてHALプロジェクトが動き始め、既に拠点を立ち上げたドイツを筆頭に、欧州各国への展開が始まっています。

原発現場でも活躍

東京電力福島第一原発事故を受けて、災害用ロボットスーツを、欧州向けに開発している医療福祉モデルを元に緊急開発しました。作業員の被曝を半減できるタンクステン製の放射線防護服は、重さが60kgあり、移動や長時間の作業が困難でした。新たに開発されたHALを装着することで、防護服の重さを感じずに、災害現場での作業を進めることができるのです。

日本には軍事研究や宇宙開発のようなハイテクの研究開発を推進するフィールドがほとんどありません。私は、この医療福祉分野での最先端の研究開発成果が、原子力・レスキューなど様々な極限環境へ展開できると信じてきました。

無限に広がる可能性

サイズ展開や超薄型化、単関節型などの開発にも注力しています。HALの応用分野は幅広く、今後は、介護の現場や工場などでの重作業支援、エンターテインメント分野等さまざまな分野での活躍が期待されます。基礎研究から現場での活用までのサイクルをスパイラルを描くように構築することで上方向のイノベーションスパイラルができ上がり、国際オープンイノベーションプラットフォームとして活躍できる日が来ることを楽しみにしています。

世界最先端の、人を幸せにするテクノロジーです



さん かい よし ゆき
山海嘉之 教授 (システム情報系)

サイバニクス国際教育拠点リーダー
最先端サイバニクス研究拠点研究統括
サイバニクス研究センター センター長
CYBERDYNE株式会社 CEO

1958年 岡山県生まれ
1987年 筑波大学大学院工学研究科 博士課程修了
2004年 CYBERDYNE株式会社設立「ロボットスーツHAL®」発表

「ロボットスーツHAL[®]」とは？

世界初のサイボーグ型ロボットとして、
国内外から熱い視線を集めている「ロボットスーツHAL[®]」。
福祉用は実用化され、現在、全国130以上の医療・福祉施設に導入され、
約300体が活用されています。
今回は、HALの開発者である山海嘉之教授にお話しを伺いました。

世界初の サイボーグ型ロボット

ロボットスーツHAL (Hybrid Assistive Limb)は、身体に装着することで、人の動作を支援・補助する世界初のサイボーグ型ロボットです。

人が身体を動かそうとする時、その運動意思が脳神経系から筋肉に伝達されます。その際にわずかな生体電位信号が発生し、皮膚表面に漏れ出します。HALは、皮膚表面に貼りつけたセンサーでその電気信号を読み取り、それをもとにパワーユニットを制御して、筋肉の動きと一体になって人の動作を支援します。

ロボットスーツHALの仕組み

装着者の方、一人一人の身体動作をより無理なく自然な形で支援出来るよう、HALには2つの制御系が混在しています。電気信号による装着者の動作意思を活用する「サイバニック随意制御システム」。もう一つは事前に人間の身体動作がプログラムされたコンピュータで人の動きを再現する、ロボットの「サイバニック自律制御システム」です。

この2つの制御系を混在させることで、一人一人に合った、より自然な身体動作の実現を可能としたのです。

グッドデザイン金賞受賞

全身一体型の「HAL-5」は、グッドデザイン金賞を受賞しました。ロボットスーツ

の開発は、機能面での
利便さ、使い心地の良
さを重視しており、デザ
インが評価されて金賞を受賞でき
たのは、まさに驚きと感動でした。

ちなみに、この全身一体型HALの重量は、23kgくらいありますが、フレームが床に接地する構造により、装着者が重さを感じることはありません。

新しい学術領域「サイバニクス」

寝る間も惜しんで人支援研究に取り組んできましたが、実用化に漕ぎつけるまでに、17年かかりました。挑戦の連続でした。ね。脳にとって、身体は、道具であるとともに、センサーでもあるので、ロボットスーツを装着すると人間は違和感を感じます。その違和感を取り除くにはどうするか…：小型化・軽量化も問題でしたし、個人差も考慮しなければなりませんでした。

これらの問題を解決するために、サイバネティクス、メカトロニクス、インフォマティクスを中核として脳神経科学や行動科学、IT技術、生理学、心理学、社会科学など、さまざまな学術領域を融合複合させた包括的な学術分野を開拓し、それを「サイバニクス」と命名しました。この新学術領域の確立に成功して、2007年には国際教育研究拠点「サイバニクス人機械情報系の融合複合」として、グローバルCOEプログラムに採択され、さらに2009年には「健康長寿社会を支える最先端人支援技



術研究」拠点として、内閣府最先端研究開発支援プログラム(FIRST)に採択されました。2011年には筑波大学に「サイバニクス研究センター」が新設され、センター長に就任致しました。

このように、人材育成と研究開発を同時展開させながら最先端の人支援技術の推進に取り組んでいます。

大学発ベンチャー企業 「CYBERDYNE」設立

HALを学会発表して以来、国内外の様々な企業・研究所・大学から共同研究の申し込みがありました。しかし、未開拓領域での新分野開拓を強力に推進するために、政府による大学発ベンチャー構想とも連動させ、2004年、大学発ベンチャー企業CYBERDYNE(株)を立ち上げました。同社を通じて、人に焦点を当てた研究開発・製造・提供を推進しています。医学部の附属病院のように、工学の分野においても大学教授と大学院生と研究者が実問題を対象として基礎と実際を行えるような組織であり、産官学民が一体となって未来を開拓する、そんな理想にむけて動いています。

ロボットスーツの展示・体験施設
サイバーダイナ スタジオ

〒305-0817
茨城県つくば市研究学園C50街区1 イーアスつくば2階
Tel. 029-828-8282
<http://www.cyberdyne-studio.com/> **入場無料**

筑波大学 保健管理センター

つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

保健管理センターは、昭和48年10月、つくば市（当時の桜村）に本学が開校すると同時に、設置され、新入生の受入れを開始した昭和49年の6月から本格的に業務を開始しました。当時は、附属病院はもとより、近隣にも医療施設がほとんどない状況の中、健康診断の実施や感染症の予防、ケガや病気への対応など、学生・教職員の健康管理・増進に貢献してきています。



久賀 圭祐
センター所長

Introduce

健康診断の実施、 平均受診率は86%

同センターの主な業務は第一に、学生、職員の健康管理です。健康管理の出発点はまず健康診断。本学には、学群・大学院生を合わせて約1万7000人の学生がいますが、健康診断の受診者数は約1万3000人。受診率は86%に達しています。

新入生は、ほぼ100%の受診率ですが、2年生になると80%台に落ち、3年、4年になるとまた受診率が上がります。外部の医療機関では所定の費用がかかりますが、本センターでは無料です。平均で86%の受診率というのは、国立大学法人の中でもかなり高い受診率で、教

職員の受診率は92%です。

久賀圭祐センター所長は、「例年、学生の健康診断は4月初旬から中旬に10日間、教職員は5月下旬から6月上旬に7日間実施しています。検査項目も学生の場合、新入生には必ず心電図をとっており、法令で決められている検査項目よりも多くの検査を行っています。教職員についても人間ドック並みの手厚い健康診断を実施していますので、健康管理のためには、ぜひ毎年受けて欲しいですね。」と話しています。

充実した診療体制

第二に重要な業務として、診療・カウンセリング部門があります。同センターで

は内科、整形外科、歯科、精神科、学生相談があります。学生は、これらの診療部門を無料で気軽に利用することが出来ます。同センターには、文部科学省共済組合の筑波大学支部診療所も併設されており、組合員の教職員であれば保険診療を受けることが出来ます。

支部診療所があることで、スタッフ、処方薬の種類や医療材料などが、他の大学と比べてもとても充実しています。

内科、整形外科、精神科を持つ 陣容とスタッフ

現在、同センターのスタッフの構成は、内科医3名、整形外科1名、精神科3名、学生相談のカウンセラー教員5名、薬剤

保健管理センター

本学学生(留学生、研究生等を含む)であれば利用可。
利用には、学生証を提示するだけで経費はかかりません。
休診日:土・日曜日、祝休日、年末・年始および健康診断実施期間
その他の特別な日を除き、午前9時から午後5時までオープン。
受付時間は当センターのサイトをご覧ください。

学生相談(カウンセリング)／精神保健相談(精神科)

月曜日～金曜日 9:00～17:00



師とX線技師が各1名、看護師4名、歯科衛生士1名、そして事務員3名が常勤し、非常勤で内科医2名、整形外科3名、学生相談員6名、歯科医2名、薬剤師、栄養士が各1名、事務1名となっています。

「国立大学の保健センターとしては、とても恵まれた陣容で運営させていただいております。ここで受診し、さらに精密検査等が必要というような場合には、附属病院をはじめとした近隣の適切な医療機関に紹介しております。」と久賀所長。

メンタルヘルスに対する 対応を拡充

第三に重要な業務に、学生相談、精神保健相談があります。学生相談の内

容は、修学に関することから、就職・進路に関すること、人間関係や友人関係のこと、さらにはメンタルヘルスについての相談まで多様な相談業務を行っています。こんなことでも相談に乗ってくれるのかな、というようなものまで何でも相談に乗りますのでお気軽に利用して下さい。来談される方も、学生本人だけではなく、友人、指導教員、ご両親などさまざまです。保健管理センターの学生相談は基本的には予約制です。またステューデント・プラザにも「総合相談窓口」があります。こちらは予約は不要です。状況によっては、精神保健相談で対応することもあります。こちらでは薬物治療も行なうことがあります。こころの問題は放っておくとより重くなったり、回復まで時間がか

かったり、学業にも支障が生じることもあるので、気になることがあれば抱え込まずに、できるだけ早めにご相談下さい。

久賀所長は「社会全体でもこころが弱い人が増えていることが問題になっていますが、当学では充実した相談体制だけでなく、定期健康診断の時に受診者全員を対象にしてメンタルチェックを行なうなど、さまざまな対応を取っております。当センターは、健康という生活の根幹に関わる業務を提供しており、さらに学生に対するケアを拡充していきたいと考えています。心の問題でも体の問題でも、保護者の方からの相談も受け付けていますのでお気軽に当センターを利用して頂きたいと思っています」と語っています。

附属学校の 名物先生 登場! ⑤

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。
そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。
このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。



今回の先生

筑波大学附属駒場中・高等学校

なか さと ゆう いち
仲里友一 教諭

Profile

筑波大学第二学群生物学類出身。大学院では細胞性粘菌の形質転換に取組む。都立高校教員を経て、1993年より附属駒場中・高等学校勤務。専門は、分子遺伝学・発生遺伝学。理学修士

「まるで大学の授業風景」

中学3年生の生物の授業にお邪魔すると、ミツバチの社会行動について講義をしていた。教壇に立つのは筑波大学附属駒場中・高等学校(中高一貫校)の生物を担当する仲里友一先生だ。

仲里先生が「大学1年の教養の授業で、10分くらいでサラッと教える内容」というように、率直に言って中学3年生の授業にしては難しいのではないかと感じた。生徒たちもザワザワとしていて、難しい授業に付いていけないのではないかと…と思ったが、決してそんな事はない。周囲の席の生徒同士で互いに教え合ったり、あるいは仲里先生の講義の展開を先回りして“予習”し合ったりしているのだ。

生徒たちが互いに相談し合うことは、授業中でもあまりとめられる事はないようだ。中学のカリキュラムを終えた

時期とはいえ、中学3年生が大学生並みの授業を受ける。そこに、附属駒場校の授業内容のレベルの高さがうかがえる。そうしたレベルの高い授業を受ける生徒たちだからこそ、授業に集中しながら話し合う事ができるのだろう。まるで、大学のゼミのような授業風景。

そんな仲里先生は、工夫された実験を授業のなかに多く取り入れていると評価される。

「よく誤解を受けるのですが、実験が多いと言っても授業全体の2分の1から3分の1程度です。多い学校ですと、半分以上の授業を実験で進めるといふ先生もいますので、けっして多い方ではないと思います。本校の生徒の場合、実験だけ

ではなく、講義で知識もつけてあげることが大切です。ただ、実験は重要だと思います。教科書に載っている事を実際にも実験してみると、原理原則がそのままきれいに見えてくるのではなく、生徒にとってはハプニングなのですが、いろんな現象が見えてくる。



例えば、『遺伝の法則』では、交配の結果は3対1になると教科書に書かれています。ところが、実際に実験をするとききれいな3対1にはならないことがあるのですね。いくつかの要因によるものですが、そうならなかった原因を探っていく事が大事です」

「ハプニングにあたった生徒たちは「失敗した」と言うが「失敗って何だろう？」と仲里先生。

「彼らが言っているのは、期待している通りにいかないってことなのですが、そんなことは研究者たちは日常的に体験している事です。何が期待通りにならなかったのか、そこを考えるのが次のステップだし、そこが面白いところです。実験したときの起こるノイズを実際に体験して考えることは、教科書に載っている事が正しいかという検証を含めて、とても大事な事だと思います」

仲里先生の授業では、教科書をあまり使わないという。「生物は、科学のなかでも比較的若い領域なので、教科書に載っていることが、数年で新しい発見によって古い情報になってしまうことがあります。教科書にない見方も出てきますので」と、教科書に頼らない授業も多い理由を解説してくれた。



科学者の手法を学ぶ

本校は、SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の指定を文部科学省より受けている。科学技術分野の人材育成のために計画を作成し、大学や研究機関などとの連携、独自カリキュラムの授業など、様々な取り組みを実施する。そのために必要な資材や機材の購入費、研修や講師の費用などの公的支援を受けることができるシステムだ。

本校では、数学、理科、国語、地理、保健体育、英語と広い分野のカリキュラムにSSHを取り入れている。しかし、専門分野を選択する生徒だけでなく、全校生徒に還元される授業も行っている。SSHの計画によって使用された機材などを、専門分野の生徒以外の授業でも取り入れるように努めているのだ。

このSSHの取り組みを通じて、仲里先生の考え方に、徐々に変化が出てきた。

「もちろん、私の授業を受けた生徒の中で科学者になりたいという生徒がいると嬉しいですよ。その反面、将来的な事を考えると、手放して喜べない現実もある」

優秀な生徒が大学に進み、大学院から研究室というコースの中で、残

念ながら挫折する姿も見えてきた。研究者を育てていく事ばかりではなく、研究者の苦勞についてもきちんと教えていく必要があるのではないかと考え始めた。

「科学者がどういう見方をしているか、という事を学習するのは、実は科学者にならない人にこそ必要だと思っています。だから、将来文科系に進学する生徒たちに、科学者がどういう考えをして、どのような間違いをするか、あるいはどのような詭弁を使うかということも見届けてほしいと思うのです」

仲里先生は「科学者の手法を学ぶ」と言葉を使う。科学は絶対的なものではなく、人間が使う以上間違いもある。

「科学が探っているのは真理だが、得られた結果は真理ではない」と言う。

「真理ではなく、その時の最大限の共通認識でしかないのです。それは結局、文化なのです。文化だから間違いもある。文学や芸術に多様な見方があるように、科学も解釈がいくつかある。そういう科学の人間臭さを学んでほしいと思っています。ですから、教科書に書かれていることと違う結果が出ることもおかしくないのです」

仲里先生は「だから科学者の言っている事はうのみにしちゃいかん、という結論になるのです」と笑った。人間臭い先生である。



宮崎 章 副校長

筑駒の理科や社会科は、高校だけでなく中学も、専門分野だけを担当して教えています。それが授業を面白くし、内容を豊かにする秘訣の一つです。そして医学部や生物系に進む生徒を多数輩出している本校「生物科」を19年間にわたって担ってきたのが、仲里先生です。単刀直入にはっきりと自分の意見を表明、良い、悪いをはっきりさせる先生

です。現在担任している中学生には非常に優しく、絶大な信頼を得ています。また8月の駒場での教員免許状更新講習では毎年「ゲノム情報を活用する遺伝子実験の紹介」を担当、「同じ身分の者が一人で丸一日の講師を務めるプレッシャー」についての吐露は、筑波の関係者に免許講習の意義と責任を再認識させ、感銘を与えました。

テニス部

日本で最も歴史あるテニス部
国際トーナメント主催に挑戦

本学硬式庭球部は、明治時代に、日本初のテニス部として、本学前身・東京高等師範学校に発足。昭和初期に世界で活躍した太田芳郎を始め、在学中にプロに転向した遠藤愛などの名選手を輩出している。

福井烈が、169連勝を記録した柳川商業高校時代に、ダブルスのペアを組んでいたという山田幸雄部長兼監督が率いて27年。現在の部員数は、男子15人、女子12人だ。12月に行われた全日本学生室内テニス選手権大会では、女子部キャプテンの関真由美選手(体育専門学群3年^{*})・大塚絵梨奈選手(同)ペアが、ダブルス ベスト4となった。

例年、個人戦では好成績を残しているものの、部としては、団体戦(リーグ戦)で勝つことが第一の目標。一部リーグ昇格を目指して、日々練習に励んでいる。



筑波大学

国際テニストーナメント開催

本学は、国際社会、地域社会、産業界との連携を深め、社会に貢献する開かれた大学を目指していることから、同部が主体となり、3年前から、国際テニストーナメント(つくばフューチャーズ)を開催している。昨年は、震災の影響で中止になったため、本年度が第2回大会。ウィンブルドンなどのメジャー大会に出場するためには、国際ポイントの上位ランキングになることが必要であり、このポイント獲得の機会が得られる同大会は、世界を目指す若手選手の登龍門となっている。

3月31日～4月8日にかけて、予選・本戦を開催。それに先駆けて、2月から、優勝者が予選への出場資格を得るワイルドカード(WC)トーナメントを3回開催した。このWCトーナメントには、部員も選手として参加。岡村麻人選手



(体育専門学群1年^{*}・シングルス)、伊藤雄選手・花木大樹選手(同・ダブルス)が優勝し、予選出場権を得たように、部員にとっても目標であり、チャンスとなっている。

取材時は予選の直前。「来てくれた選手に喜んでもらえる大会を開こうという意識でやってきました。大会の準備も、試合の運営や審判も大変ですが、それだけに、前回開催した時には、自分たちの手で国際トーナメントが開催できたというものすごい達成感が得られました」と、竹中健矢男子部キャプテン(同4年)。今回は、新たに、テニスを通した国際ボランティア活動として、「ブラインドテニス講習会」も開催する。

石津幸恵選手

同部には、プロテニスプレーヤーの石津幸恵選手(同1年)も所属している。17歳の時にウィンブルドン・ジュニア選手権女子シングルスで準優勝した日本女子テニス界期待の星だ。

「先輩や仲間にも恵まれて、大学生活は



とても楽しかったですし、大学の講義は興味深く、テニスをする上でいろいろ役に立ちました」と筑波大での1年を振り返る石津選手だが、学生とプロ選手の両立は、考えていたよりずっと厳しく、テニスに関しては不本意だったという。そこで、この4月からは、1年間休学してアメリカ・サンフランシスコに拠点を移し、テニスに専念することを決意した。

「最終目標は、伊達公子さんの世界ランキング4位という記録を超えること」と石津選手。一回りも二回りも大きく成長して、本学に戻って来る日を、楽しみに待つばかりである。



前身の師範学校から140年の歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

[つくばスポーツ ONLINE]

<http://www.sports.tsukuba.ac.jp>

【筑波大学体育会】

<http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

テニス部

■ 平成23年度関東学生新進テニス選手権大会本戦

【女子シングルス】ベスト8 大塚絵梨奈(体専3年)、足立愉有子(同2年)

【女子ダブルス】ベスト4 藤原利菜(同2年)・梁川唯(同1年)

男子バレーボール部 女子バレーボール部

■ 全日本バレーボール大学選抜男女東西対抗戦

【東軍男子】出未田敬(体専2年)、【東軍女子】高橋那依(同4年)が出場 男女とも東軍勝利

平成24年度春季関東大学バレーボールリーグ戦1部

4/14～5/20 日本大学健志台米本記念館他

柔道部

■ 柔道ワールドマスターズ

【男子66⁺級】3位 森下純平(体専3年)

【女子78⁺級】3位 緒方亜香里(同3年)

■ 柔道グランドスラム・パリ大会

【女子78⁺級】3位 緒方亜香里(同3年)

■ 柔道ワールドカップ・オーバーヴァルト大会

【男子73⁺級】3位 西山雄希(同2年)

■ 柔道グランプリ・デュッセルドルフ大会

【男子66⁺級】3位 森下純平(同3年)

【女子48⁺級】2位 遠藤宏美(同1年)

■ 柔道ワールドカップ・プラハ大会

【男子90⁺級】優勝 西山大希(同3年)

第27回皇后杯全日本女子柔道選手権大会 4/15 横浜文化体育館

2012年アジア柔道選手権大会 4/27～29 ウズベキスタン・タシケント

平成24年全日本柔道選手権大会 4/29 日本武道館

平成24年全日本柔道選抜体重別選手権大会 5/12、13 福岡国際センター

平成24年関東学生柔道優勝大会・関東学生女子柔道優勝大会 5/27 埼玉武道館

ラグビー部

■ 第48回全国大学ラグビーフットボール選手権大会

ベスト4

第13回東日本大学セブンズ 4/22 秩父宮ラグビー場

アジア5カ国対抗 4/28 秩父宮ラグビー場 他

日本代表として 竹中祥(体専2年)選出

硬式野球部

2012年首都大学野球春季リーグ戦 4/1～5/27 土浦市宮球場(5/19、20) 他

弓道部

関東学生弓道選手権春季トーナメント大会 5/5 東京武道館

陸上競技部

第91回関東学生陸上競技対校選手権大会 5/12、13、19、20 国立競技場

剣道部

第58回関東学生剣道選手権大会 5/13 日本武道館

第44回関東学生女子剣道選手権大会 5/19 日本武道館

男子ハンドボール部 女子ハンドボール部

2012年関東学生ハンドボール連盟春季リーグ戦

4/14～5/20 (男子)日本大学健志台米本記念館他 (女子)日本女子体育大学他

※学年は大会時

斬桐舞



“年齢・障がい・国籍・経験の違い”
“舞台上で踊る人と見る人”

全ての垣根を取りはらい、
みんなで楽しむユニバーサルソーラン



雙峰祭の舞台をエネルギッシュな演舞で盛り上げるYOSAKOIソーランチーム「斬桐舞」(矢澤真人顧問)。学外でも、創部4年目とは思えない知名度で、各種イベントや小中学生への演舞指導に引っ張りだこ。多い時には、月15回以上舞台上に立つという。メンバーも増え続け、現在では、本学学生約50人と小学4年生から60代までの外部メンバーの計90人ほどのチームに成長した。



小学生への演舞指導

ユニバーサルソーランと
参加型演舞

「斬桐舞」のチームコンセプトは、ユニバーサルソーラン。それは、全盲のメンバーと一緒に踊る中で生まれた「斬桐舞」独特のコンセプトだ。老若男女、障がい、国籍、経験の違いに関わらず誰もが一緒に楽しむことを目指している。全員の踊りを統一するのではなく、下半身が不自由な方には、上半身だけを使った踊りを考えるなどの工夫をして、各自ができる範囲で楽しく踊る。

「自分のできる範囲で」というと、ゆると捉えられがちですが、それぞれ、自分の出せる100%を追求しようというものです。障がいがある方も、その

人なりの100%を目指して向上心を持って練習しています」と、三代目舞長の加藤寿美さん(教育学類2年)。

そして、そのユニバーサルという発想から、「舞台上で踊る人」と「見る人」という垣根も取り払い、観客にも一緒に踊って楽しんでもらう参加型演舞を行うのも特長だ。1曲目で、踊りを見て楽しんでもらったなら、2、3曲目は、司会者(MC)による踊りのレクチャーなどを交えて、お客さんを巻き込み、一緒に踊って楽しんでもらう。

「まつりイン台湾」公演

そんな「斬桐舞」の参加型演舞に、日本と台湾の文化交流の祭り「まつり

このコーナーでは、課外活動として、演奏会や展覧会、発表会、大会、ボランティア活動などで、その腕前を披露している、文化系・芸術系サークルの催しを紹介します。

【筑波大学芸術系サークル連合会】ホームページ <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

【筑波大学文化系サークル連合会】ホームページ <http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>



「祭りゆうき」の
ポスターに登場(中央左)



イン台湾」の参加団体をセレクトしていた旅行代理店が着目。昨年12月2～5日の台湾遠征が実現した。



MCをする3代目舞長
加藤寿美さん

参加型演舞が成功するかどうかは、MCの声かけに大きくかかっている。台湾公演でも見事にMCを成功させた加藤さん。

「台湾では、3つの会場で、3曲ずつ4回踊りました。中国語に訳してもらいながらのMCでしたし、台湾のお客さんが一緒に踊ってくれるか不安でしたが、そんな心配はありませんでした。アイコンタクトすると笑ってくれたり…最後は、感動して踊り

ながら泣いちゃったんですけど、台湾の人も涙を流してくれて、踊りや笑顔に国境はないことを本当に実感しました」と台湾公演の様子を語ってくれた。

また、台湾公演の話を受けた際に、「東日本大震災への支援を台湾から受けたことに対して、踊る以外にも、感謝の気持ちを伝えよう」と企画。羽に「ありがとう」と書いた折り鶴を、お客さんに一羽ずつ手渡ししたり、「感謝」と書いた横断幕を曲の最後の決めポーズ



一人一人が両手を広げた写真を200枚つないで制作した「写真アート」

の時に掲げたりした他、日本が1つになって頑張っていることを写真で表現した「写真アート」を製作し、会場で展示した。

次の海外遠征先はアメリカ。4月21～22日に、「第45回サンフランシスコ桜祭り」で演舞する予定だ。

活動の場もユニバーサルな規模になってきた「斬桐舞」。これからも、いろいろな場所の、いろいろな人たちに、筑波大発の笑顔と元気を届けてほしい。



新入生歓迎祭

■ 各課外団体がさまざまなパフォーマンスで新歓アピール
4/9～5/31(場所/本学内)

第28回つくば芸術祭

■ 地域の方々との交流を目的とした芸術・文化系サークル主催のイベント
5/3～6(場所/つくばセンター周辺)

第38回やどかり祭

■ 本学学生が、地域の方々や新入生と親睦を深める祭り
5/25、26(場所/平砂宿舎)

管弦楽団

■ 第71回定期演奏会
5/12(場所/ノバホール)

吹奏楽団

■ 第67回定期演奏会
6/16(場所/ノバホール)(時間/16:00開演)

全国大学ラグビー選手権で 国立大学初の4強進出

第48回全国大学ラグビーフットボール選手権において、本学ラグビー部は1回戦で東海大学(関東大学リーグ戦2位)に22対19で勝利、続く2回戦では、明治大学(関東大学対抗戦3位)に11対9で勝利し、国立大学初のベスト4に進出しました。準決勝は、国立競技場で帝京大学(関東大学対抗戦1位)と対戦しましたが、残念ながら3対29で敗れ、念願の決勝進出は阻まれましたが、健闘が光りました。



T O P

フランス国民議会仏日友好議員連盟会長 ディディエ・カンタン氏一行が 藻類バイオマス実験棟を視察

東北の被災地や再生エネルギー技術の視察を目的として来日したフランス国民議会の仏日友好議員連盟ディディエ・カンタン会長一行が、2月1日、衆議院事務局国際部議員外交支援室と同行して、山田信博学長を表敬訪問されました。その後、世界トップクラスの藻類バイオマス実験棟を視察し、渡邊信

教授(生命環境系)から説明を受けられ、活発な質疑応答が行われました。





第2回筑波大学研究成果発表フォーラム2012 ～震災に向き合う最先端研究～ を開催 会場 筑波大学 東京キャンパス文京校舎

第2回筑波大学研究成果発表フォーラム2012～震災に向き合う最先端研究～が、1月28日、東京キャンパス文京校舎において、開催されました。本フォーラムは本学のこれまでの研究活動とその研究力を社会に分かりやすく情報発信するための活動として昨年度から開催しており、本年度は「震災に向き合う最先端研究」をテーマとし、東日本大震災後の

本学の災害関連研究の一端を紹介しました。

フォーラムでは白川英樹本学名誉教授(2000年ノーベル化学賞)による「社会における科学・技術の役割」をテーマとする特別講演を行い、その後のポスターセッションに引き続いて、本学の5人の研究者による最先端研究発表を行いました。



特別講演する白川英樹名誉教授



山海嘉之教授



八木勇治准教授

ICS

第2回日本・北アフリカ学長会議開催

本学が主催し、東北大学、名古屋大学、九州大学が共催、アルジェリア、エジプト、リビア、モーリタニア、モロッコ、チュニジアの6カ国大使館の後援による、第2回日本・北アフリカ学長会議が、2月10、11日につくば国際会議場で開催されました。

学長会議は、「新しい社会づくりにおける大学の役割」をテーマとして、日本の23大学(5大学長)と、上記北アフリカ6カ国の17大学(10大学長)が参加して行われました。同会議では、山田信博学長の開会挨拶に続き、文部科学省の奈良人司大臣官房審議官(高等教育担当)及び東北大学の木島明博総長補佐による基調講演、そして4つのパネルディスカッションが行われました。

本学では、会議で得られた成果を

基に、今後もチュニジアに設置した海外大学共同利用事務所(BUTUJ)を中心として日本と北アフリカとの交流・協力をさらに活性化させていく予定です。



常総市との連携協定を締結

締結日 2月14日

- 締結内容**
- 1 「地域の特性を活かしたまちづくり」
 - 2 「文化、スポーツ、芸術を通じた地域活性化」
 - 3 「教育支援及び人材育成」
 - 4 「健康及び福祉の増進」



鹿嶋市との震災復興に向けた連携・協力協定を締結

締結日 2月27日

- 締結内容**
- 1 「震災からの復興に向けたまちづくりの推進に関すること」
 - 2 「津波及び液状化対策に関すること」
 - 3 「地域防災計画の改定に関すること」

茨城県立医療大学との連携協定締結

締結日 2月23日

- 締結内容**
- 1 「学部学生教育の充実」
 - 2 「大学院学生教育・研究交流の推進」
 - 3 「附属病院の連携」



ドイツ学術交流会(DAAD)と パートナーシップ・プログラムに関する協定を締結

締結日 2月15日

- 締結内容**
- 本パートナーシップ・プログラムは、研究者の相互交流の促進を通じて、ドイツの高等教育機関と本学との長期的協力関係の構築を目的とするもので、双方のマッチング・ファンドにより、研究者派遣のための渡航費・滞在費を支援するものです。既に本パートナーシップ・プログラムは平成23年度から試行しており、今後は協定に基づくファンドの設置により、バイラテラルなパートナーシップの強化が期待されています。





本学では、スポーツによる大学の活性化や社会貢献を目指して設立された「筑波大学スポーツアソシエーション(TSA)」を軸に、社会貢献事業として、さまざまな「スポーツ教室」を主催しています。

「子どもたちにさまざまなスポーツの魅力を知る機会を与えたい。そして、そのスポーツに取り組んでいる子どもには、より高いレベルに接する機会を作りたい」という地域からの要望に応じて、平成23年度は、つくばみらい市で陸上競技教室、野球教室、柔道教室を、守谷市でバスケットボール教室、陸上競技教室、体操教室を開催しました。つくばみらい市で計131人、守谷市計235人の小・中学生が参加しました。

開催されたスポーツ教室の1つ、野球教室には、つくばみらい市の小中学生が46人が参加。硬式野球部の河村卓監督と、硬式野球部学生11人が指導しました。守備やバッティングなどの技術面での

アドバイスにはもちろん、甲子園出場経験のある学生の話などにも、子どもたちは、目を輝かせて聞き入っていました。

柔道教室では、本学柔道部顧問で、オリンピックメダリストでもある岡田弘隆准教授と柔道部学生3人が指導にあたり、体づくり・動きづくりのトレーニングと、レベル別の指導を合わせて3時間行いました。

岡田准教授は、TSAの活動の一環として、継続的なスポーツ教室である「つくばユナイテッド柔道少年柔道教室」(週4回)や「筑波大学少年柔道錬成大会」(参加者843人)も主催しています。この柔道教室からは、前回の全国少年柔道大会で準優勝者を輩出しました。本学の地域貢献活動から、将来本学で、そして世界で活躍する選手が誕生することが期待されます。

こうした「スポーツ教室」には、運動好きの子どもたちが多く集まります。そうした

子どもたちの能力を伸ばすことも大切ですが、運動が苦手・嫌いという子どもたちの深刻な運動不足も放置できない社会問題となっています。

「勉強は大切ですが、運動をしなくても勉強ができればいいということではありません。適度な運動をして、健康な体を作るということは、子どもにとって非常に重要なことです。今後は、そういう意識をしっかりと高めさせるような活動もしていきたいと考えています」と岡田准教授。現在、スポーツが苦手・苦手意識があるという子どもを対象に、「子どもが、遊び感覚の中から、体を動かす面白さを知ることができる」プログラムの実施を計画中です。

世界レベルの人材を抱える本学運動部ができる地域貢献は、無限の可能性を秘めています。今後も、より広く、深く地域に浸透し、本学と地域が共に発展していくことが望まれます。



野球教室



柔道教室



陸上教室

「平成23年度茨城県子育て応援企業表彰」優秀賞受賞

本学が、平成23年度茨城県子育て応援企業表彰の「仕事と子育て両立支援部門」において優秀賞を受賞し、2月8日、表彰式が茨城県庁にて行われました。

本賞は、仕事と育児が両立できる職場環境づくりや、仕事と生活の調和がとれた働き方ができる職場環境づくりに取り組んでいる企業のうち、顕著な成果があった企

業を表彰するものです。当該企業が社会的に評価される仕組みをつくることにより、企業の自主的な取組みの促進を図ることなどを目的として実施しています。



本学学生が第1回サイエンス・インカレで7つの賞を受賞

本学の学生4人が、2月18日と19日に東京の日本科学未来館などで開催された「第1回サイエンス・インカレ」(主催:文部科学省、特別協力:東京エレクトロン株式会社、後援:独立行政法人科学技術振興機構)で7つの賞を受賞しました。

「サイエンス・インカレ」は全国

の自然科学分野を学ぶ学生が、自主研究を発表し、競い合うことによって、能力や研究意欲を高めるとともに、課題設定能力やプレゼンテーション能力などを備えた創造性豊かな科学技術を持った人材を育成することを目的に初めて開催された催しです。今回は165組の応募があり、書類審査により

口頭発表部門40組とポスター発表部門86組が採択されました。

本大学からは口頭発表部門に8人、ポスター発表部門に3人の計11人が採択され発表を行い、以下の3人がサイエンス・インカレ奨励表彰と協力企業賞を、1人が特別協力企業賞を受賞し、合計7つの賞を受けました。

<サイエンス・インカレ奨励表彰> 口頭発表部門

- 生命環境学群 生物資源学類2年 返町洋祐
「黒鉛粉末-菌体間の相互作用による微生物燃料電池の高出力化」
- 理工学群 応用理工学類4年 景山達斗
「血管網を備えた三次元臓器作製のためのハイドロゲルの開発」
- 理工学群 工学システム学類2年 西田惇
「リアルタイム共有システム構築のためのプラットフォームの開発とその応用」
(近畿大学 中嶋研人(代表者)との共同研究)

<特別協力企業賞> 東京エレクトロン賞

- 理工学群 応用理工学類4年 山岸安奈
「ストレス診断を目指したマイクロデバイスの開発」

<企業賞>

- エア・リキード賞 返町洋祐
- 富士フイルム賞 景山達斗
- 東芝賞 西田惇

●主な受賞等一覧

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
日本水処理生物学会第14回論文賞	張振亜教授(生命環境系)	—
第59回電気科学技術奨励賞	青柳秀紀教授(生命環境系)	—
Highly Commendable Paper Award, International Conference on Shock & Impact Loads on Structures 2011	磯部大吾郎准教授(システム情報系)	—
フード・アクション・ニッポン アワード2011 (研究開発・新技術部門)入賞	佐竹隆顕教授(生命環境系)	—
ドイツ連邦共和国 Verdienstkreuz 1. Klasse(一等功労十字賞)	上田浩二名誉教授	—
第11回TXテクノロジー・ショーケース in つくば 2012 ベスト研究交流賞	盛武敬講師(医学医療系)	—
平成23年度いばらきビジネスプランコンテスト「優秀賞」	熊田博明准教授(医学医療系)	—
日本放射線技術学会第58回関東部会研究発表大会大会長賞	磯辺智範准教授(医学医療系)	—
平成23年度日本エネルギー学会賞(学術部門)	内山洋司教授(システム情報系)	—
平成23年度文部科学大臣優秀教員表彰	雷坂浩之教諭(附属視覚特別支援学校)	—
平成23年度医学教育等関係業務功労者表彰	鴻巣由紀男(病院総務部) 中村貴子(医学系技術室)	—
日本混相流学会年会講演会2011学生優秀講演賞	高木雄司 (システム情報工学科 構造エネルギー工学専攻 博士前期 2年) 野村康通 (システム情報工学科 構造エネルギー工学専攻 博士前期 2年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師()
日本機械学会動力エネルギーシステム部門優秀講演表彰	上澤伸一郎 (システム情報工学科 構造エネルギー工学専攻 博士後期 1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子講師()
第24回化学とマイクロ・ナノシステム研究会優秀ポスター賞	山本達之(生命環境科学研究科 生物資源科学専攻 博士前期1年)	市川創作教授(生命環境系) 佐藤誠吾教授()
平成23年度日本結晶学会年会ポスター賞	小西航(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期2年)	高橋美和子講師(数理物質系)
テクノリネサンス・ジャパン賞	宮本祐任 (システム情報工学科 社会システム工学専攻 博士前期1年) 高松正典(生命環境学群 生物資源学類 4年)	—
International IUPAC Conference on Polymers and Organic Chemistry 2012 Poster Award	川島裕嗣(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期2年)	後藤博正准教授(数理物質系)
日本経済調査協議会50周年記念懸賞論文大賞(留学生部門)	Carla Bringas (人文社会科学部 国際地域研究専攻 博士前期2年)	箕輪真理准教授(人文社会系)
第6回日本統計学会春季集会学生優秀発表賞	栗下和義(数理物質科学研究科 数学専攻 博士前期2年)	青嶋誠教授(数理物質系)

※所属、職名、学年は受賞年時

「NHKニュース7」で活躍中のニュースキャスター、武田真一さんは、緊急時でも落ち着いた対応と温かな人柄から、幅広い視聴者の支持を集めています。今回は、90年社会学類卒のOB、「NHKの貴公子」こと武田真一さんにお話を伺いました。



武田真一さん

NHK チーフアナウンサー

プロフィール

1967年 熊本県生まれ
 1990年 筑波大学第一学群社会学類卒業
 1990年 NHK入局
 2008年～ 東京アナウンス室
 「NHKニュース7」メインキャスター

— 熊本出身だそうですが、遠く離れた本学を選んだ理由を聞かせてください。

「新しくできた研究学園都市の中にある、日本の最先端の英知が集まった大学だ」と、父親から聞いたことがあったので選びました。ただ、九州の高校生ですから、東京もつくばも同じようなところかと思っていました。当時のつくばは、周りに何も無い荒涼としたところだったので、宿舎に入って数日間は、「なんといふところに来てしまったんだ」と、泣き暮らしました。とにかく寂しかったです。

— その寂しさは、いつ頃まで感じていましたか？

4年間あまり払拭されませんでしたね。でも、寂しさを紛らわせるために、「自分って何なんだろう」と考えたり、友達と夜通し語り合ったり…「寂しさをどう紛らわすのか」というのが、今も自分の原動力になっている気がするんです。寂しい思いをして得たことが、学生時代に一番学んだことだと思います。

— 奥様は高校の同級生で、学生時代は熊本～つくばの遠距離恋愛だったとか。それも寂しさの原因でしょうか。

宿舎の公衆電話からよく電話をしましたね。月に6万円もかかったりして、電話代のために、必死でアルバイトをしていました。学生時代は、バイトとサークル活動と友人とのおしゃべりで過ぎていった感じです。

— 学生の頃からアナウンサーを目指していたのですか？

アナウンサーというのは、別世界の人かと思っていて、自分になるなんて考えたこともありませんでした。NHKの入社試験は、ディレクター志望で受けたので、「アナウンサーとして採用」という連絡を受けた時は、とてもびっくりしました。ただ、音楽と演劇のサークルに入っていて、舞台上で自分が作った歌を歌ったり、演技したりして、肉体を通して、言葉で何かを表現するということをやっていたので、

そういうことが仕事にできればいいな、とは漠然と思っていたんです。一番なりたかったミュージシャンは無理だと思いましたし、アナウンサーの仕事の中でも、言葉による表現ができるかなと考えて、NHK入局を決めました。サークルでの舞台活動の経験は、アナウンサーとしての仕事に役立ったと思います。

— 入局後、熊本に4年、松山に3年、東京に9年勤務した後、沖縄に赴任されました。

学生の頃から沖縄が大好きでした。何度も遊びに行っていて、沖縄に友達もいるのですが、その一人に、「なんで沖縄が好きなの？」って聞かれ、「そりゃあ青い海、白い砂浜…」とリゾート客目線で答えた時に、ちょっと悲しそうな目で見つめられたことがありました。その時ハッと、「沖縄人である彼には、自分にはわからない、沖縄に対する複雑な思いがあるんだ」と気が付いて、以来、ずっと心にひっかかっていたんですね。それで、沖縄に住んで、沖縄の

ことを一から勉強したいと思って、異動のタイミングの際に沖縄を希望しました。

— その時のご友人の気持ちは理解しましたか？

沖縄の人とたくさんお話をしましたし、住んでみてわかったこともたくさんありますが、2年弱しかいませんでしたし、想いの部分まで本当に共有するところまではなかなかいきません。でも多分、一番の違いというのは、本土の人は、沖縄のことを理屈で理解するのに対して、沖縄の人たちは、長年にわたる経緯とか歴史で考えるということだと思えます。「ニュース7」では、そういうことを踏まえて伝えるようにしています。

— 他に、沖縄に行ってよかったと思うことは？

沖縄局は、ローカル局なので、いろいろな意味で視聴者と放送局の距離がとても近く、誰のために放送するかというのがすごく明快なんです。「誰かのために、何かを伝えるということ」という放送の原点がよくわかって、「放送って、やっぱりいい仕事だな」と再認識できたことは自分にとって大きかったですね。

— 現在は東京で、NHKのエースとして活躍されています。東日本大震災の際には、街が津波にのまれていく様子を、視聴者の恐怖を煽ることなく、冷静に実況報道したことが、国内外で高く評価されました。

「ニュースの一番の役割は緊急報道で、その緊急報道は、視聴者の皆さんの命と財産を守るためにある」と思って、ずっと仕事をしてきました。地震が起きたらどのように伝えるかという訓練もしていましたし、そのためのマニュアルも整備されていたので、僕は、あの時、その通りに職務を全うしたとは思いますが、でも、「結果として放送で人の命が救えなかった」という想いが強く残りました。「言葉というものはなんて無力なんだ」と、しばらくは呆然自失の状態でした。

— 世論の評価とは裏腹に、ご自身の中では葛藤があったのですか？

震災から1カ月半ほど経って、災害報道も少し落ち着き、被災地を訪れたりしているうちに、「地震が起きてから、津波がくるまで30分。その間に、人を動かすことができるとしたら、それはやはり情報であり、言葉、肉声しかない」と改めて思うようになりました。そして、放送が届かなかった、届いたとしても人を動かさなかったという反省に基づいて、どうやったら、僕らの言葉が人を動かす放送になるのかを考えてみようかと…。進むべき方向を見つけて、自分の仕事にもう一度向き合っていく力が湧いてきました。

— 冷静な実況放送を変えるということですか？

アナウンサーが取り乱して伝えるということはありえませんし、常に冷静であるべきですが、「いつも同じ調子でいいのか、もっと、未曾有の災害が起きているということ、視聴者に直感的にわかってもらうような表現の手法があるのではないか」ということです。同じ言葉を何度も繰り返したり、命令口調で呼びかけたり、「東日本大震災を思い出してください、命を守るために、今すぐ逃げてください」というような紋切り型でない呼びかけを混ぜたりというような…。報道グループのアナウンサーたちと半年以上か

けて議論を重ね、地震・津波時の緊急報道用マニュアルを作成し、運用を開始しました。自動的に放送の文言を表示する装置の中にも、我々が考えた新しい呼びかけがすでに入っています。まだ、そういう事例が起きないので、ご覧になったことはないでしょうけれど…。

— 新しい緊急報道に興味はありますが、災害が起きないに越したことはありませんね。最後に、本学の学生にエールをお願いします。

僕は、アナウンサー志望でもありませんでしたし、めちゃくちゃな新人で、本当に怒られまくりました。でも、なんとかやって来ています。自分の道が拓けるまでには、本当に時間がかかるものです。急に結果は出なくても、焦らず、希望を持って、自分を信じ続ければ、必ず道は拓けると思います。

— 筑波大学にも一言お願いします。

日本の大学というと、東大や京大が代表するように、官界や学界に人材を送り出すという機能が重視されていますが、筑波には、既存の人材育成の枠にとらわれないような大学であって欲しいです。そして、いろんな社会、あるいは世界に、魅力ある人材をたくさん輩出していてもらいたいと思います。



附属学校教育局
学校支援課
附属視覚特別支援学校
塚本依津子さん



我が家には、8歳になるミニチュワダックスの女の子?がいます。昨年の大震災以後、どうも地震予知能力が備わったみたいで、地震が起きる前には、いきり立ち雄叫びを上げるのです。震度によって、パフォーマンスの違いはありますが、ほぼ100%の確率で、どの警報より早く知らせてくれます。以前にはなかった行動なので、とても不思議です。本当に気象庁に勤めてもらいたいくらいなのですが、彼女が予知能力を發揮しないで済む穏やかな日々を願うばかりです。ちなみに被災地から預かっている2匹の避難犬にはないようです。

次回は、附属視覚特別支援学校高等部教諭 柴田健一さんです。
「学生とのコミュニケーションを大切にされ、とても温かいお人柄の先生です。治療室主任として大変お世話になっています」

ビジネス科学等支援室
金子百合子さん



「いってらっしゃーい!」思いがけない言葉にこらえていた涙が止まらなかった。小笠原諸島、父島での「おが丸」出航時のお見送りの言葉。東京、竹芝桟橋から約25時間30分。一航海、約6日。よく「1日かけてしかも船旅なんて…」と言われる。たしかに、船酔いはキツイ、陸に上がってもしばらくは揺れたまま。それでも…。海では野生のイルカと一緒に泳ぎ、ザトウクジラの声聞き、陸ではオガサワラオオコウモリを待ちつつ流星も楽しめる。見知らぬ人とのふれあいにウルツときたり…。ほんの数日の旅ですが確実に元気になれるところ。お気に入りの場所のひとつです。

次回は、数理物質科学等支援室の三上ゆきさんです。
「高1の隣の席で知り合い、誕生日、血液型、最初の配属先が一緒という同期つながり。頼りにしています!」

リ シ ー エ ッ セ イ



附属学校教育局学校支援課
附属久里浜特別支援学校
高橋孝さん



久里浜の学校のあおい空には、羽田から飛び立つ飛行機と帰ってくる飛行機が山手線のラッシュアワーのごとく飛び交っています。そうそう、学校から見える東京湾には、大型タンカーやら客船、釣り船が点在しています。そんな中、学校前の海辺でお魚さんとの出会いを楽しんでいます。アナゴ、キス、カニ、タコ、ヒラメ、カレイ、カサゴ、イシモチ、ハゼ、マゴチ、海のお星様ヒトデときにはサメ。今度の出会いは、鯛がいいな。最近、親切な釣り船屋さんを見つけました。三浦半島のつり情報は、いつでも提供できます。ぜひ連絡ください。

次回は、附属桐が丘特別支援学校教諭の西垣昌欣さんです。
「粘り強くすぐ牽引力のある先生で、新しく副校長になられました。ますますのご活躍を祈念します」

総務部職員課
大久保正二さん



写真右から2人目

最近ダイエットのために始めた自転車。きっかけは長男が自転車に乗ってから30kgも減量したからです。自分も健康診断でいつもメタボ判定…これでは駄目と長男に自転車入門。最初の長距離ライドは筑波山一周約90Km、80Km過ぎに疲労のために転倒、横転、幸い怪我もなく無事帰還。現在は、週末ライダーといたいのですが、少しサボり気味。職場の自転車仲間と5月に近くの筑波サーキットで開催される8時間耐久レースにエントリー。仲間迷惑を掛けないようにこれからは本腰をいれてトレーニングしたいと考えています。とはいえ、最近ゴルフに浮気しがちですが。何ともあれ元気に後1年、定年までは勤まりそうです。(感謝)

次回は、病院総務部総務課の岡島隆治さんです。
「図書館情報大学時代からの付き合いです。同じダイエット仲間です」

附属学校教育局
学校支援課
城野雅明さん



高校の時に友達と冗談半分で、喜多方ラーメンを食べに行きたいが電車ではつまらないし自転車で行こうということになり、6泊7日の旅行をしたことが自転車を始めたきっかけでした。進学した大学にもたまたま自転車部があり、夏の合宿ではキャリアにテントや鍋を積んで北海道を走り回りました。それ以降自転車で縁のない生活をしていたのですが、一念発起して新しい自転車を入手し念願だった日光いろは坂に挑戦。とはいえ走ってみると改めて、自転車で上る道じゃないですね。ペダルは重いし膝は痛いし、何やってるんだ自分って思いながら上るのですが、癖になる楽しさがあるんです。

今回は、附属視覚特別支援学校中学部教諭の間々田彦さんです。「たまに一緒に牛タンを食べに行きます。趣味の引き出しがやたらと多い方です」

計算科学研究センター
倉持聡さん



学生時代、スポーツは、卓球ぐらいでしたが、筑波大に就職してからは、先輩方から勧められて、バレーボール、山歩き、軟式野球、硬式テニスなどをやってきました。バレーボールは筑波大の職員サークルで、野球とテニスは国信大の職員サークルでした。今も続けているのは、山歩きとテニスです。山は、感動です。感動をこの年齢になっても覚えることができるのは幸せです。山のお勧めは、大学に一番近い宝鏡山(小田山)です。筑波山のすばらしい紫峰が望めます。テニスはサークルの幹事を務め、随時部員を募集していますので、昔取った杓柄で再びラケットを握ったらいかがでしょうか。

今回は、生命環境科学等技術室の小崎四郎さんです。「テニスのチームメイトです。春と秋の大会では、頼りになる力強いパートナーであり、チームの要です」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

企画室
講師
岩本浩二さん



宿舎に住んで以来、ゴミの散乱に困ってました。集積所が古く崩壊寸前のため、出し方が悪くカラスなどに漁られていたようです。あんまりひどいので、一念発起して、ご近所の皆様をお誘いして集積所を作り直しました。足場パイプとネットの良くあるタイプですが、背中がボード、入り口がカーテン式など立派なものになりました(写真)。集積所がキレイになると出し方も良くなったのは不思議です。今では、ゴミの散乱も無くなり、満足しています。筑波地区でもエコステーションプロジェクトで集積所がキレイになったので、大学でもゴミの出し方が良くなることを期待しています。

今回は医学医療系講師の小林麻巳人さんです。「異分野融合を目指すtrans Territory Forumつくばの仲間、すごい行動力と発想力、説得力にいつも感動しています」

研究推進部研究企画課
藤田祐嗣さん



1992年のバルセロナ五輪がきっかけとなって、スポーツ観戦が趣味となりました。サッカーやアメフト、野球だけでなく、マイナー競技でもつつい見せてしまいますし、学生の頃からはスタジアムにも足を運ぶようになりました。TVの前で声援を送っていた小2の頃のように、試合観戦に行くとい瞬で童心に戻ってしまいます。美しいピッチが目前に広がる瞬間、スタジアムが大歓声に包まれるときの高揚感はTVでは絶対に味わえません。今年はまだ行ったことのない競技場や学生スポーツにも足を延ばそうと計画しています。お勧めの競技場やスポーツがあればぜひ教えてください！

今回は体育芸術系支援室の細沼祐介さんです。「同期です。圧倒的な歌唱力とライブパフォーマンスは必見です。若手カラオケ会もまたやりましょう!!」

※所属、職名は平成24年3月現在

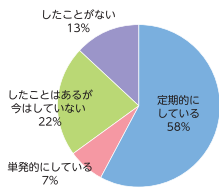
本学教職員と学生にアンケート調査を実施し、本学関係者の興味や関心のあることを紹介する「つくばNOW」。アンケート調査をお願いした際には、ぜひご協力をお願いいたします！

第3回 アルバイト

これから、初めてのアルバイトに挑戦するという新入生も多いことでしょう。
 「今の筑波大生は、いったいどんなアルバイトをしているの?」
 「教職員の皆様は、どんな経験をして、学生のアルバイトについてどう考えているの?」
 こんな疑問を解決すべく、第3回は、アルバイトに関するアンケート調査を実施しました。

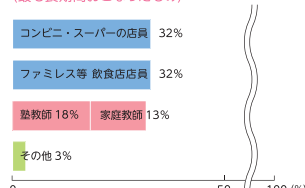
3大人気バイト「塾講師+家庭教師」「スーパー・コンビニの店員」「ファミレス等の飲食店」

Q アルバイトをしていますか?(学生)



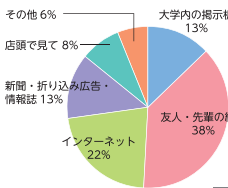
グラフ1

Q どんなアルバイトをしていましたか?(学生) (最も長期間おこなったもの)



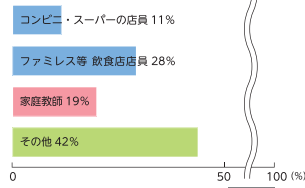
グラフ2

Q アルバイトはどのようにして見つけましたか?(学生)



グラフ4

Q どんなアルバイトをしていましたか?(教職員) (最も長期間おこなったもの)



グラフ3

学生の87%が、なんらかのアルバイトを経験していて、58%は定期的なアルバイトをしています(グラフ1)。教職員も、学生時代にアルバイトを経験した人が92%でした。

学生が、どんなアルバイトをしているかという、学生アルバイトの代表的な存在である「塾講師+家庭教師」「スーパー・コンビニの店員」「ファミレス等の飲食店」の3種がほぼ同数となり、人気も3分されていました(グラフ2)。その他のアルバイトとしては、教育・研究補助(4人)、その他の販売員(3人)、TA(2人)などの他、ソフトウェア開発や、映像制作といった専門知識を生かしたアルバイトの方もいました。

教職員の方は、上記3種以外が42%で(グラフ3)、郵便・新聞配達(3人)、工場等作業員(2人)の他、郵便局内勤、医療事務、引越し業者、校正・データ入力、食品加工、倉庫整理、警備員など、いまの学生に比べて、バラエティ豊かな仕事に挑戦していたようです。

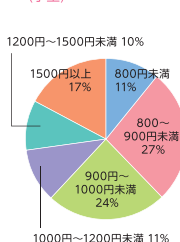
こうしたアルバイトは、友人や先輩の紹介で見つけたという学生が最も多く(38%)、「バイトは、人間関係が大切なので、友人・先輩などの紹介で選ぶと失敗がないです」というアドバイスが添えられていました。知らない店の場合、「飲食系・販売系は、お客として、その店の様子を見にいった方がよい」という意見もありました。

アルバイトのエピソード

- 新聞配達のパイトで、1年以上無欠勤で勤めたら、自家用バイクのガソリンをいつでも無料で入れさせてもらえることになった(40代・男性)
- 正月用餅作りのパイトで、仕込みから、餅つき、鏡餅作りまで任せられた。5日間の重労働で睡眠時間は1日3時間ほどだった(50代・男性)
- 熱い油を自分の足にかけて、火傷した(30代・男性)
- 外国人患者の多い病院でのアルバイト。英語を使って対応すると大抵は感謝されたが、ある時、機械が悪い方に中途半端な英語を使ってしまい、烈火のごとく怒られた(20代・男性)
- 誰のミスか不明な出来事自分のせいだとされた時、自分のせいでないことが言えなかった(40代・女性)
- 建築現場での作業はきつくと、いろいろな人と話ができ勉強になったが、腹が減り、給料のほとんどが食事代に消えてしまった(50代・男性)
- 配達ミスによって、配達先以外の方にも迷惑をかけたことを知り、責任の重さを感じた(40代・男性)
- TAをしていて、採点ミスをしてしまい、責任感が必要だと実感した(男性・博士課程前期)
- 叱られて落ち込んだり、褒められて喜んだり、さまざまな感情を実感した(30代女性)

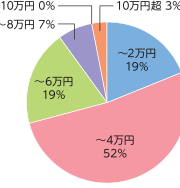
学生の時給は800円～1000円未満、平均月収は2～4万円

Q 時給はどのくらいですか?(学生)



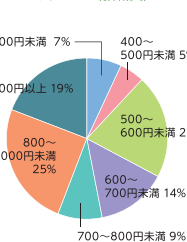
グラフ5

Q 1か月のアルバイト収入は平均するとどのくらいですか?(学生)



グラフ6

Q 当時の時給はどのくらいでしたか?(教職員)



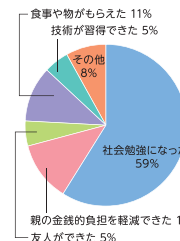
グラフ7

学生のアルバイトの時給は、800円～1000円未満が51%を占めました(グラフ5)。家庭教師は、全員が時給1500円以上と高く、塾講師も、最も多いのは1500円以上の人でしたが、次に多いのが900円～1000円未満と、金額に幅がありました。月収は、2万円～4万円が52%(グラフ6)。10万円以上収入がある学生は、研究や映像制作など、専門性の高い仕事をしていました。

教職員の方の学生時代の時給は、グラフ7の通りですが、世代によってバラツキがあり、50代以上の方に着目すると、時給500～600円未満が最も多い結果となりました。30年間で、平均的な時給が300円程度上がったといえるようです。

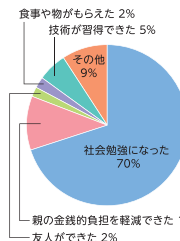
アルバイトは社会勉強

Q アルバイトをして良かったと思うことは何ですか?(学生)



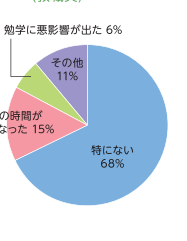
グラフ8

Q アルバイトをして良かったと思うことは何ですか?(教職員)



グラフ9

Q アルバイトでマイナスになったことはありますか?(教職員)



グラフ10

学生、教職員共、アルバイトをして最も良かったと思うことは、社会勉強になったということ。アルバイトをして、マイナスになったことはないという方が大半でした。

アルバイトの選び方アドバイス

- 学業第一。両立できるものを選ぶ
- スキルが身に付くものを選ぶ
- 長く続けるには、自分に合っているかが重要。適当に決めない方がよい
- 積極的なんでなくてもやってみるべき
- やりがいがあるバイトを選ぶ
- 他人がやらない珍しい仕事に挑戦するとよい
- いろいろな人と関わりあえる仕事がおすす
- 自分が希望する就職先と正反対のアルバイトにして視野を広げる
- 就職を取る人には、塾講師がよい実務経験になる
- 時給は重要(交通費・食事等の条件を含む)

Tsukuba Supporters

本学を内外から応援(サポート)していただいている団体を紹介します。

[財団法人 筑波学都資金財団 筑波大学学生宿舎管理事務所] 地域社会と連携して、入居している学生が快適な生活を送るための学生宿舎を運営していただいています。

現在、本学には、平砂・追越・一の矢・春日地区に合わせて60棟約4000室の学生宿舎があります。開校から40年近くが経ち、初期にできた宿舎が老朽化してきたため、平成21年度から5カ年計画で、25棟をリニューアル改修中です。この改修を期に、山本早里准教授(芸術系)の協力を得て、彩り豊かな外装になり、見た目も楽しく美しい学生宿舎群に生まれ変わりつつあります。〔「公共の色彩賞」受賞〕

これら全ての学生宿舎を管理・運営しているのが、財団法人 筑波学都資金財団 筑波大学学生宿舎管理事務所です。民間のアパート管理とは違い、何か困ったことがあればいつでも相談できるというサービスセンター的な役割を担って、24時間態勢で学生を見守っています。

また、学生が世の中に出る前に、宿舎生活で社会的なものを学ぶことができるように、という配慮

をしているのも特徴です。例えば、毎週月曜日の朝には、30分間、職員全員で宿舎敷地内のゴミ拾いをしています。この活動は、職員がゴミを拾う姿を学生に見せることによって、ゴミの始末に対する学生の意識を向上させることを狙いとしています。

平砂宿舎敷地内では、新入生が親睦を深め、地域との交流を図ることを目的に、毎年5月に宿舎祭(やどかり祭)を開催します。たくさんの地域住民の方が楽しみにしているやどかり祭は、本学と地域をつなぐお祭りであり、同管理事務所も学生を支援しています。



学生宿舎案内

宿舎がある各地区(春日を除く)には居住棟と共有棟があり、共有棟には、管理事務所・食堂・理容室・美容室・浴場・電化製品店などが設けられています。

居住棟には、男子棟と女子棟があり、それぞれの玄関には、暗証番号式ロックシステムが導入されていて、居住者の安全を確保しています。

新入生が入居する単身用一般室は、広さ10㎡(約6畳)。1カ月の共益費を含む使

用料は約1万4千円です。居室内には、机・椅子・ベット・洗面台等が備えられており、毛布等の寝具が貸し出されています。内線電話やインターネットは無料で利用できます。風呂、トイレ、台所などは共用です。

この他、改装が終了したユニットバス付きの単身用宿舎が16㎡31000円/月。2人室、世帯用などの宿舎もあります。

入居に際しては、留学生や、東日本大震災の被災者、経済的支援が必要な学生が最優先になっており、留学生のほとんどが入居しています(24年2月現在、留学生入居

者数1173人)。続いて新入生が優先されますが、入居枠が少ないため、通える範囲に住んでいる学生はお断りしている状況です。前述した最優先の学生以外の契約は1年単位で、部屋に空きがある場合には、抽選で当選した学生のみ2年時以降も入居できます。

東日本大震災の際には、一の矢宿舎で停電・断水があり、2~3日間共有棟で寝泊まりした学生がいましたが、改修工事を行う老朽化した棟も含めて、建物に大きな被害は出ませんでしたので、耐震面も安心できるといえるでしょう。



単身用一般室



各階共用キッチン



洗濯室

Tsukuba Supporters

本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔茗溪会とは〕 社団法人茗溪会(西野虎之介理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする公益法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。



オープニングの壇上
右から清水一彦副学長、西野虎之介
茗溪会理事長、新井達郎実行委員長

茗溪・筑波グランドフェスティバル

茗溪・筑波グランドフェスティバルは今回で第16回を数え、2012年1月21日(土)に筑波大学学生会館で開催されました。本年度のテーマ字は「醸」、醸す(醸造、醸成の醸)です。人と人との繋がりは瞬間的に形成される場合もありますが、本来、徐々に形成されて本物のつながりになっていくものであり、そのような場を提供するような意味を込めています。

シンポジウムは、「あなたの知らない醸造の世界～ワイン・日本酒のプロフェッショナルの

お話～」を中心に、身近なテーマで、ビジネス、基礎科学の面も含めてお話をいただきました。基調講演を萩原健二氏(㈱サドヤ社長)が、ついでパネルディスカッションとして内山裕夫氏(筑波大学生命環境系教授)、藤村俊文氏(米福酒造代表取締役)が加わり、新井達郎実行委員長(筑波大学数理工学系教授)が司会ですすめられました。

つづく懇親会でも、世代を超えた交流を楽しみました。



シンポジウム 左から新井達郎氏、萩原健二氏、藤村俊文氏、内山裕夫氏



懇親会風景



懇親会での応援団WINSの演技

平成23年度筑波大学芸術賞、茗溪会賞決定!

筑波大学芸術専門学群、並びに大学院人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻では、毎年度の卒業研究および修了研究の中から特に優れたものを選考し、筑波大学芸術賞および茗溪会賞の両賞を授与して表彰しています。

今年度の受賞研究・受賞者は次のとおり。

◎筑波大学芸術賞

芸術専門学群

- ・「かたち」(木彫/彫塑) 石田亜依子
- ・『広島市の被ばく樹木に関する研究～生きる戦争遺産としての現状とこれからのあり方について～』(論文/環境デザイン) 大脇なぎさ

博士前期課程芸術専攻

- ・「赤い上着の男」(木彫/彫塑) 渡部直
- ・『美術館における市民の主体的な活動について～横須賀美術館「プロジェクトボランティア」の先駆的な事例をもとに～』(論文/芸術支援) 新井貴子

◎茗溪会賞

芸術専門学群

- ・「つくば俯瞰図」(油彩/洋画) 清水総二
- ・「paper ∞ IV」(紙立体/構成) 内藤遥

博士前期課程芸術専攻

- ・「麒麟を喰らう象」(油彩/アクリル/洋画) 樋口健介

茗溪会賞の作品写真



「つくば俯瞰図」
(油彩/洋画)
清水総二



「paper ∞ IV」
(紙立体/構成)
内藤遥



「麒麟を喰らう象」
(油彩/アクリル/洋画)
樋口健介

本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔紫峰会とは〕 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

UTcollectionの新しい取り組み

以前にもご紹介しましたが、「UTcollection」は筑波大学オリジナルブランドとして紫峰会が企画・販売を行っています。大学や地元の魅力を活かした商品開発を通して、筑波大学ファンを増やし、絆をより強いものにできればと願っており、その一環として地元の産業振興に貢献することを目指す新たな取り組みを進めています。平成21年に始まった「UTProject」は結城紬新分野開拓研究会、筑波大学産学リエゾン共同研究センター、筑波大学キャリア支援室との共催によるプロジェクトです。関連組織が強みを生かし、産学官連携により地元の産業振興に貢献することを目指してきました。その中で紫峰会は、開発された商品の販売や、マーケットを拡大する役割を担っています。

結城紬とは

「結城紬」(ゆうきつむぎ)は、国の重要無形文化財に指定されている絹織物で、茨城県・栃木県が主な産地です。世界で唯一、絹真綿から職人の手作業によって撚り(より)をかけずにつむぎ出した糸は「軽く、暖かく、柔らかい」という風合いを生み出します。平成22年には、ユネスコ(国連教育文化機関)によって世界無形文化遺産に登録されました。本場結城紬は、全て手作業で作られるため



UT大賞
「ティータイムセット～楽しいお茶のひととき～」



筑波銀行本部ビル2階ギャラリーで開催された作品展の様子

一反(幅約37cm、長さ約130cm)で、無地で約60万円以上、細かい柄のものでは1,000万円位するものもあります。

結城紬素材を活かした日用品 コンテストの開催

本学学生をはじめ幅広い年代の方々に結城紬と接してもらい、産業活性化に資することを目的としてコンテストを開催しております。結城紬の製作過程で生じる素材を使った日用品を募集することで、伝統的なスタイルの技術、文化を活かすことを学んでもらい、結城紬を広く紹介しております。平成23年度の第3回コンテストでは、以下の2部門に、のべ49点の応募がありました。

1. 端切れ部門(端切れを使った日用品)
端切れ:反物から着物を作った後に残った余りの布
2. きりすね(糸)部門(きりすねを使った日用品)
きりすね:織機の構造上、織ることができずに残る糸



紫峰会賞「結城紬のマグネット」

コンテストのアイデアを商品化

第2回応募作品のアイデアを活かして「本場結城紬しおり」が商品化されました。本場結城紬は高価で接する機会が少ないものですが、端切れを利用し価格を最低限に抑えることで手軽に「本場結城紬」が購入できる商品となりました。また、端切れは同じものが少ないためほとんどの商品が一点物となり、世界に一つだけのしおりを選ぶ楽しさがあります。「本場結城紬しおり」は1枚580円で当会UTShopなどで好評発売中です。

「UTProject」の今後の展望

平成23年度UTProjectの中で、筑波大学校章柄入りの本場結城紬織物の試作を行いました。この成果を活用した完全オリジナルの本場結城紬商品の開発を目指しています。また、日用品コンテストについても、幅広い年代の方々に結城紬と接してもらうことからさらに一歩踏み込んで、チャリティー部門や学生参加などを検討しています。今後の新たな展開にご期待ください。



筑波大学校章柄入り本場結城紬織物の試作品

Media Appearances 本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(1月~3月)

● 新聞記事一覧

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	支援協定に基づき、土浦市は、本学に寄付講座を開設し、独立行政法人国立病院機構・霞ヶ浦医療センターに、2012年度から、本学から教員の医師3人を派遣予定	付属病院	東京(1.4) 常陽(1.10)
2	本学の教授や学生約20人が、東日本大震災の復興に向けた連携協定を結ぶ北茨城市と高萩市で現地調査を実施	大澤義明教授(システム情報系)	茨城(1.6) 朝日(1.6) 読売(1.6)
3	本学研究グループが開発した超小型衛星ITF-1「結」は、それ自体の表面温度等を測るセンサーと、そのデータを発信する機能を備える。手作りアンテナなどで誰でも受信可能	亀田敏弘准教授(システム情報系) 岡村彩乃(工学システム学類4年)	朝日(1.12) 産経(1.17)
4	本学が、グローバル教育院設置	グローバル教育院	日刊工業(1.12)
5	本学附属病院が「胃内バルーン減量療法」の外来を開始。治療の対象となるのは、高度肥満症患者など。全国で4番目、県内では初の試み	附属病院 スポーツ健康クリニック外来	常陽(1.12) 毎日(1.14) 産経(2.9) 東京(2.15)
6	本学の青柳秀紀教授らが、シロアリを活用して細菌を選別する技術を開発	青柳秀紀教授(生命環境系)	日経産業(1.13)
7	本学が、法医学医を養成する全国初の「法医学レジデント(専門研修医)コース」を新設	本田克也教授(医学医療系)	毎日(1.14夕、15)
8	本学と国立大学協会は、22日、「防災・日本再生シンポジウム-希望につながる地域再生と大学」を開催	大村謙二郎教授(システム情報系) 糸井川栄一教授(システム情報系)	毎日(1.19) 茨城(1.19) 東京(1.20) 読売(1.21) 常陽(1.21)
9	本学大学院生ら3人が、若者間で使われている言葉「リア充」を価値基準に、自分たちの生活行動を評価し合うスマートフォン向けアプリ「REAL10」を開発。ネット上で公開し、無料のサービス提供を開始	田中二郎教授(システム情報系) 土佐伸一郎(システム情報工学研究科 博士前期1年) 藤田 訓義() 金子将大(情報科学類4類)	茨城(1.20) 産経(1.20)
10	本学は、28日、東日本大震災に向き合う最先端研究をテーマとした「研究成果発表フォーラム」を開催	白川英樹名誉教授 山海嘉之教授(システム情報系) 八木勇治准教授(生命環境系) 境有紀教授(システム情報系) 榮武二教授(医学医療系) 鈴木石根教授(生命環境系) 東京キャンパス文京校舎	毎日(1.25)
11	本学研究成果発表フォーラムで、八木勇治准教授が、東日本大震災の詳細なデータ解析結果を発表	八木勇治准教授(生命環境系)	毎日(1.30)
12	東日本大震災の被災者を支援する本学生の有志団体「Tsukuba For 3.11」が、27日、本学で、宮城県気仙沼市の復興フォーラムを開催	水落裕樹(生物資源学類3年) 千葉友希子(国際総合学類2年) Tsukuba For 3.11(被災者支援団体)	毎日(1.28)
13	本学は、1日、新しいスパコンの稼働を発表。今までのものに比べると約56倍速い。	計算科学研究センター	朝日(2.2) 読売(2.2) 常陽(2.4)
14	本学が、環境中の放射性物質の測定精度を高めるために、国際原子力機関(IAEA)から提供された標準試料を、国内21研究機関に配布	恩田裕一教授(生命環境系)	毎日(2.4夕、2.5) 朝日(2.4) 読売(2.6)
15	Jリーグと筑波大が、試合を観戦した人に行った調査で、「Jクラブは被災地復興に貢献している」と肯定的な回答をした人が86.3%に上った	仲澤真准教授(体育系)	読売(2.7)
16	本学と自治医科大の研究チームが、高齢者が短時間の運動をすると、右脳の「右前頭極」が活発化し、判断力を担う左脳の機能低下を補って、判断力が向上することを発表	征矢英昭教授(体育系)	毎日(2.12) 茨城(2.11) 日本経済(2.14)
17	本学主催の「日本・北アフリカ学長会議」が10、11日に開催。北アフリカから6カ国17大学、日本側から23大学の学長らが参加	本学	毎日(2.12) 茨城(2.11)
18	▽茨城論壇：大学界において、FD(Faculty Development)がようやく普及・定着してきた。FDの組織化・システム化はこれまでの大学教育を大きく変えるものである	清水一彦副学長	茨城(2.11)
19	本学と常総市が、地域活性化で連携する協定に調印。本学が、災害復興を除く、包括的な連携協力を自治体と締結したのは、県、つくば市などに続き7番目。	山田信博学長	茨城(2.15) 朝日(2.15) 常陽(2.15)
20	アジア太平洋経済協力会議(APEC)の域内で、共通した防災教育の教科書作りを開始。東日本大震災を教訓に、本学が提案・主導する	磯田正美准教授(人間系)	毎日(2.16)
21	本学と県立医療大が連携協定締結	山田信博学長	毎日(2.24) 茨城(2.24) 常陽(2.24) 朝日(2.28) 日刊工業(3.2)
22	本学の定例記者会見で、柳沢正史教授が、脳科学の最先端を紹介	柳沢正史教授(分子行動科学研究コア)	茨城(2.24)
23	鹿嶋市と本学は、「震災復興に向けた連携および協力に関する協定」を締結	本学	茨城(2.29)
24	本学が高校との連携事業の一環で企画運営している「第4回高校生アートライター大賞」の表彰式が行われた	玉川信一教授(芸術系) 直江俊雄准教授(芸術系)	北海道新聞(2.24夕)
25	本学が有機薄膜太陽電池の解析手法開発	丸本一弘准教授(数理工学系)	日刊工業(3.2) 日経産業(3.2)
26	3D折り紙の製作ソフト(三谷純准教授開発)を使って作成した「3D折り紙」が商品化へ	三谷純准教授(システム情報系)	茨城(3.2)
27	本学は、2013年度から、春・秋各15週の二期制に移行すると同時に、10週や5週の短期集中型の授業を導入	本学	東京(3.3)
28	本学などの研究グループは、100テラヘルツの周波数帯域を持つ「周波数コム」を発生させることに成功	長谷宗明准教授(数理工学系)	日刊工業(3.5)

● テレビ放送一覧

	内 容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	3.14発生の千葉県東方沖地震関連	八木勇治准教授(生命環境系)	テレビ朝日報道ステーション(3.15)

[j u n e]

[a p r i l]

- 1日(日) 春季休業(～4/7)
- 5日(木) 附属桐が丘特別支援学校入学式
- 7日(土) 東京キャンパス大学院入学式・オリエンテーション
- 9日(月) 入学式
新入生歓迎祭本祭
理療科教員養成施設入学式
附属小学校入学式
附属中学校入学式
附属高等学校入学式
附属久里浜特別支援学校入学式
- 10日(火) 附属駒場中学校入学式
附属駒場高等学校入学式
附属坂戸高等学校入学式
附属視覚特別支援学校入学式
附属聴覚特別支援学校入学式
附属大塚特別支援学校入学式
- 11日(水) 新入生オリエンテーション(～4/12)
- 13日(金) 第1学期授業開始
- 16日(月) 科学技術週間(～4/22)



- 2日(土) スポーツ健康システム・マネジメント専攻
オープンキャンパス
- 9日(土) 国際経営プロフェッショナル専攻
オープンキャンパス
- 11日(月) 第1次選考合格発表(ACII)
- 14日(木) 関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」
(附属聴覚特別支援学校)(～15)
- 15日(金) 学習公開・研究発表会(附属小学校)
- 16日(土) 学習公開・研究発表会(附属小学校)
経営システム科学専攻、
企業科学専攻システムズ・マネジメントコース
オープンキャンパス
- 23日(土) 企業法学専攻・企業科学専攻企業法コース
オープンキャンパス
- 26日(火) 第1学期授業終了
第2次選考(ACII)
- 27日(水) 第1学期期末試験(～7/3)

[m a y]

- 19日(土) 春季スポーツ・デー(～/20)
- 26日(土) 生涯発達専攻・生涯発達科学専攻
オープンキャンパス



お詫びと訂正

Tsukuba Communications 特集号においてシステム情報系の河合先生のお名前が間違っておりました。正しくは河合達雄先生です。お詫びして訂正させていただきます。



筑波大学
University of Tsukuba